

おじさまにオンナにして頂きました

小説 木森山水道（夜山の休憩所）

体験版

「ご挨拶」

この度は、DL & ご鑑賞いただき誠に有難うございます。
気分転換、活力復活、ぐっすり眠れる等の効用が現れれば幸甚です。

「製品版と体験版の相違点」

体験版には文章と挿絵の全てが収録されておりますが、
製品版には次に挙げるおまけ要素が追加されます。

- ・挿絵に使用した全CG（9枚分）のデータを同梱。
（サイズは800×600。JPEG形式）
- ・小説の巻末に全挿絵を連続して収録。
- ・小説のごく一部を扇情的な記号に差し替えて演出を強化。

「ご注意ください」

- ・PDF閲覧ソフト（Adobe Reader 7と9と で確認済み）によっては「見開き」で見る際、ページが右から左へ進みます。
- ・本製品はフィクションです。また、個人の範囲でお楽しみ下さい。

お楽しみいただけましたら、
製品版のご購入を是非ご検討くださいませ。

挿絵は、メーカー様の利用規約に基づいて

「佐野俊英があなたの専用原画マンになります」（G・J?様）と、
「七人のオンラインゲーマーズ～オフライン～」(G・J?様)

を利用して作成しました。

尚、当サークルはG・J?様とは無関係です。

『佐野俊英があなたの専用原画マンになります』
利用規約に基づく表記 シリアルコード S/N:GJ0079908

目次

ことの始まり：…………… 3

第一話 おじさんの家へ…………… 5

第二話 おじさんたちに見られながら…………… 10

第三話 また、相手をしてもらいました…………… 26

第四話 裸の付き合い…………… 42

第五話 おじさまを誘惑しちゃった日…………… 51

第六話 家内台風…………… 71

第七話 おじさまに初めてを…………… 84

第八話 望まなかったスワッピング…………… 101

ことの終わり…………… 121

主な登場人物

二野辺 春美(にのべ はるみ) 二十歳。ある事が原因でセックスを嫌悪している。

狼塚 千風(おいづか ちかぜ) 三十八歳の快活な人妻。営業職に就いている。

狼塚 広一(おいづか こういち) 四十三歳。冴えない風体の翻訳家で、千風の夫。

ことの始まり

二〇××年八月。盆休みのある夜。

墓参りのために帰省してきたある夫婦が、幼馴染夫婦の家で酒を飲んでいた。

「なあ……うちの娘をオンナにしてくれねえか？」

近況報告めいた世間話から夫婦の性生活話を經由して、その夫からポツリと出た。お銚子をチビチビ舐める程度だった彼は、赤ら顔だが酔ってはいない。口から出た声音は、酔っ払いが出せる憂い声でもなかった。

「春美ちゃんか。今は二十歳位か？ 美人になってるんだろうなあ……『コマシの広一』と呼ばれる俺も、そんなに若い子は久しぶりだ……いいぞ、揚げてやる」

四十三歳の冴えない風体の中年が、いやらしくニヤニヤしながら快諾する。

自分の妻と話の娘の母親が隣にいてもお構いなしだった。細君の方は夫を一瞥して深い溜息をついたがそれだけ。あとはマイペースでグラスをあおぎ、つまみをつつく。

話題の子の母親は重々しく口を開いた。

「あの子多分……初体験をすませてます……だからそういう意味ではなくて……」

「ん？ ……ああ、はいはい了解了解」

ことの始まり

おじさまにオンナにして頂きました

天井を向いてしばし思案顔をした後、得心したとばかりにコクコク頷く中年。

「けど、娘の性教育は実の親がやったらどうなんだよ。大事なことだろ？ 親子関係が気まずいのならともかく、お前らのことだからんなことはないんだろ？」

「やればやってるさ、春美が昔のままだったら。……今はすっかり人が変わってしまつて……オレと嫁がやっても恐らく意味がないんだ」

「ふむ、訳ありか……どういふことか話すよな？ でなきや、引き受けねえぞ」

ニヤついていた中年から軽薄さが抜けた。我関せずを通していた妻もグラスと箸を置き、耳を傾ける。

幼馴染の夫婦は頷き合々と、短くない話を始めた。

第一話 おじさんの家へ

二〇××年八月下旬。空は曇天。

狼塚夫婦は幼馴染夫妻の娘を迎えに駅の改札に来ていた。

「あ、いた。あの子ね………こりやあ、すぐに処置した方がいいわねえ」

事前に送られていた写メールを見ながら妻。軽口めいているが、言いながら吐き出した吐息は重い。その夫であり『オンナにしてくれ』と頼まれた中年も同感だった。彼女は休日の人森の中でもよく目立っている。

とても二十歳には見えなかった。白いTシャツとジーパンは下ろしたてのようにピンとしているものの、容姿を見るとそれは親が用意したと分かる。子供思いのあの二人なら、幼児にするのと同じ風に大切な旅に出る娘に手取り足取り着付けることもするだろう。

彼女はソバージュの長髪だが、そこかしこが跳ねている。目はどんよりと垂れ、顔の血色も悪い。人生に嫌気が差した者が滲ませる淀んだ雰囲気を漂わせている。若者に特有の澁刺さなど皆無だった。

自動改札を抜けた彼女は、修学旅行に持って行きそうな大きい鞆を抱えながら公衆

おじさまにオンナにして頂きました

電話が並ぶ一角へと入った。ジープンのポケットからボロボロの財布を取り出して、テレフォンカードを抜く。

妻の携帯電話が鳴った。ディスプレイには公衆電話からだとなっている。やはり彼女で間違いなかった。

「それじゃあ、まずは自己紹介しましょう」

預かる娘を自宅のリビングに座らせた妻がすつくと立ち上がった。豊かなバストを包む短めのタンクトップと、ホットパンツに押しこめられた豊満な臀部がフルンと揺れた。三十八歳には不似合いな服装だが、明るい美人なのでさまになっている。

部屋で一番若い彼女とて、ホームステイ先の夫婦とは面識があり、今座っている場所に座ったこともある。両親からも経歴は聞かされているはずだったが、知っているますなどと異論を挟まない。立ち上がった中年女をただぼんやりと見上げている。

座席は、女性二人が隣り合い男が向かいに陣取る形だった。年季の入った皮の安ソファアが、誰かが身じろぎする度にギュツギュツと鳴る。

強化ガラスのテーブルには、夫が用意した人数分のモンブランケーキとコーヒーが並んでいる。まだ誰も口をつけていない。

「私は狼塚千風。三十八歳で、モデルハウスで営業をやっています。あと、スリーサイ

第一話 おじさんの家へ

ズは……な・い・しよ」

おどけた調子でウインク。向けられた彼女が眉根を寄せた。年甲斐もない女に困惑したというよりも、どう答えたらいいか分からないという風だった。

妻が座ると入れ違いに夫が立った。

「俺は狼塚広一。四十三歳の翻訳家。年中家にいます。知つての通り、君の父親の陸とは幼馴染です……久しぶりの我が家へようこそ、春美ちゃん」

「はい、ありがとうございます」

鈴の音みたいに澄んでいるが、小さくてどことなくおどおどした声で彼女。座ったままで頭を下げる。

「それじゃ、最後は春美ちゃん宜しく」

妻の言葉に、わたしのことは知ってるはずなのに、と眉根を寄せたが、すぐに分かりましたと返事をした。

「わたしは二野辺春美です。二十歳で……その……浪人で………じゅ、受験勉強がし易いからと父母が勧めてくれて、ご夫妻が許してくださったので滞在させていただくことになりました……し、しばらくお世話になります。宜しくお願ひします」

額と膝が当たりそうになるまでおじぎをする。

「うん、宜しくね。紹介ありがとう」

おじさまにオンナにして頂きました

花が咲いたような笑顔を妻が向けると、春美は安堵の吐息を吐いた。

「安いケーキとインスタントのコーヒーだけでどうぞ。食べながら聞いて頂戴ね」
ソファーに腰掛けたのを見届けて妻が続けた。

「一時的には言え、うちの子になるからにはうちのルールに従ってもらいます」

「ル、ルールですか？」

心配顔で春美。コーヒーカップに伸ばしかけていた手が宙空で止まる。

「難しいものではないわ。食事は決まった時間に三人で。家事は分担して。入浴時間の規則。あと、困ったことは家族に相談する。相談された家族は真面目に相談に乗る、と。こんなところかしら。何かあればその都度家庭内会議ね。おっけえ？」

「はい、分かりました」

なんだそんなことかと、春美から不安の色が消えた。

「よろしい。一息ついたら部屋へ案内するわ。荷物はそのバッグだけなの？」

「いえ、事前に聞いていたお部屋の広さを考えて、もう少し持ってくる物を選びました。宅急便の白猫ワコクの単身パックで、明日送られてくる予定です」

「分かったわ。私も旦那も手伝うわね。時間指定はしていた？」

「していましたが、休日なので時間通りに来るかどうか」

「ああ、うちの管轄は大抵時間通りだから。多分、大丈夫よ」

第一話 おじさんの家へ

そんなことを話しながら、狼塚家の時間が過ぎていく。

（おっさんが話に割り込むより、今は千風に任せといた方がいいな。まずは同性同士で仲良くさせて、その後には俺も距離を縮めればいい。水揚げはそれからだ）

そんなことを思いながら、広一は向かいの二人を眺めていた。

【二野辺春美の日記より】

二〇××年八月〇□日。天気は曇り。

お父さんの友達のご夫婦の家に来てきた。

高校三年の夏からご無沙汰だったけれど、お二人とも親切に迎えてくれた。

普通の人ならヒクような情けないわたしの姿を見ても、スルーしてくれた。

今も優しい人たちみたい。お父さんとお母さんが娘を預けるのに選んだ人たちなのだから、当たり前前といえれば当たり前前だろうけれど。

駄目なわたしを見捨てないでいてくれる、お父さんとお母さんの顔に泥を塗らないように今まで以上に明日から頑張らなきゃダメだ。

今日はもう寝るけれど、リラックスできる自分の部屋じゃないから、また嫌な夢を見てしまうのかな。それがちよつと嫌だ。

おじさまにオンナにして頂きました

第一話 おじさんたちに見られながら

二〇××年九月●□日。午後九時過ぎ。春美は入浴していた。

「はあ……気持ちいい……」

身体の隅々まで洗い、洗髪も済ませた。今は、ぬるま湯の心地よさを楽しんでいる。居候を始めてから二週間余りが過ぎていた。親の友達夫婦はあれやこれやと懇切にしてくれるので、それなりにリラックスして暮らせている。

職場見学の学生がさせられる程度の、簡単な仕事やルールを与えられているもの、こなすのに費やす時間も労力もどうということはなく、本分の勉学の妨げになることはない。逆に気分転換になっている面もある。過度にお客扱い、腫れ物扱いされていないというのも気が楽だった。

「そろそろ上がらなきゃ。千風さんも広一さんも待っているんだから」

ゆっくりお風呂を楽しんだ後でいいから、夫婦の寝室に来て欲しいとふたりに言われていたのだ。こんなことは初めてであり、どういうことかも気になったが、春美は店子であるので素直にはいと返事をした。

脱衣所に入ると身体と髪を拭き、大人しいデザインの純白下着と緑地の安いパジャ

第二話 おじさんたちに見られながら

マを着る。夫婦は既に入浴を済ませていたので、風呂釜を止めて浴槽の水も抜いた。三人分の洗濯物が入った洗濯機を作動させる。不要な電気を消したことや、風呂場の蛇口を間違はなく締めたことを確認し、彼女は言われた場所へ向かった。

コンコン。

「春美ですがー」

ノックをすると、すぐに返事が来た。

——どうぞ。入ってえ。

千風の声が返ってきた。いつもは余韻までもがキビキビしている凛とした口調なのに、妙に間延びした返事だった。

首を傾げながらドアを開ける。

生々しくて生温かい臭いが鼻に覆い被さってきた。果実や人口甘味料では真似のできない、人間だけが放てる甘酸っぱさだ。

「……っ!？」

キングサイズのベッドの上で、夫婦が絡み合っている。仰向けに寝そべる千風の上に、広一が押し掛かっている格好だった。

膝を立てている妻の両足の間に右太腿を割り込ませ、股間を緩やかに圧迫している

おじさまにオンナにして頂きました

広一。同時に、同性でも溜息の出る艶やかな髪がうねる千風の頭を抱きながら、うなじに顔を埋めている。ちゅぱちゅぱと吸い立て、堪らなそうな呻きを漏らさせる。二人とも全裸で汗だくだった。

「あ……………あ……………済みませんでした！」

瞬間湯沸かし器みたいに沸騰し、春美が退出しようとした。

「待って……………いいのよ、あなたに居て欲しいの」

「正確には、見ていて欲しい、けどどな……………春美ちゃんが謝ることはないんだ」

夫婦の制止に大人しく従う春美。直ぐにでも逃げ出したい気分だったが、店子だけに逆らうこともできない。広一が続ける。

「夫婦の夜の生活がマンネリになってきたから、手伝ってもらいたいと思ってね。他人に見られながらするセックスはかなり燃えるもんだから」

「ね、お願い……………助けると思って——あぁんツ……………」

「わ、分かりました」

震える声で春美が頷いた。

「春美ちゃんサックス。でも、もっと近くに来てよ。その方が、楽しめるからさ」

「は、はい……………」

嫌とは言えず、従順に従う。心臓がバクバク鳴っている。一步、二歩と歩くだけで

第二話 おじさんたちに見られながら

眩暈がしてくるが、必死に耐えてベッドの一メートル先に座る。膝を立てて足を三角形にした行儀のよい体育座りだった。

「あつ……くう……あ、ありがとうね、春美ちゃん……んんっ」

二十歳の女子の前で、夫婦は体位を変えた。夫は胡坐になり、妻はその両腿の上にお尻をつく。千風の両足はそれぞれ広一の腰骨の脇に来ていて、初心な娘へ股間が大盤振る舞いされている。

(すごい……わたしのと全然違う……)

年の離れた大人の女性の性器は匂い立っていた。大陰唇はぷっくり膨れてはつきりと谷間を作っており、夫の人指し指がゆっくり行き来するのに合わせて、緩慢な開閉を繰り返している。覗く膣内粘膜は薔薇色で、愛液に塗れて飴色を纏っている。

幾度もの性交渉で磨かれて見事に肥厚したのだろうが色のくすみはなく、素肌の生白さよりも幾分濃い肌色をしていた。

縦裂からはトロトロの蜜が漏れていて、撫でる夫の人差し指を汚しながら、会陰を伝ってシート上に染みを広げている。

「あん……見てえ、春美ちゃん……私の恥ずかしい姿を……はあ……」

熱い吐息をこぼす千風。肌は湯気が見えそうな位に上気している。見られながら大事な部分を愛撫されて快感を感じているのは間違いなさそうだった。

おじさまにオンナにして頂きました

(千風さんもこんな風になるんだ……)

快活で気さくで、ほとんど他人である自分にも最初から細やかな気配りをしてくれた。狼塚家に早くに慣れることができたのは、彼女の親切さがあつたからだ。春美は思っている。きつと、職場でもテキパキと仕事をこなしていて、人望もあるのだろう。

自分の数倍も稼いでいると広一が笑いながら話していたこともあつた。

有能なキャリアウーマンみたいな千風のあられもない姿は、背徳感めいた驚きを感じさせ、ずっと見ていたいと思わせる不思議な魅力を醸し出している。

(胸がドキドキしつ放しで……身体も火照ってきた……見ているだけなのに……)

全身が微熱で炙られているような体温の昂ぶりだった。股間が特に熱くなっていて、むず痒さも湧き起こっている。

「はあ……はあ……変な気分になってきた……」

閉じていた太腿がほんの少し左右に広がり、右手が胸の前を通過して股間に下りる。

広一の指が妻の大陰唇をなぞる光景が頭の中で何度もリピート再生されていた。

(やだ……わたし何をしようとしているの……でも、我慢できない……)

細い指がパジャマズボンの上から自分の花卉の根本に触れる。目の前に居候先の夫婦がいるというのに、こんなことははしたないと思っても、快感を求める気持ちの方が強く――。

第二話 おじさんたちに見られながら

ボタン！

「春美、興奮したのなら手伝ってやるぞ」

「お父さんとお母さん、それに広一さんと千風さんで気持ちよくしてあげるわ」
部屋の隅のクローゼットから、春美の両親が飛び出てきた。ふたり共裸だった。

「お、お父さん！ お母さん！ どうしてここに——え、ええっ!？」

羞恥と混乱で目をシロクロさせる春美。友達夫婦のセックスをオカズにオナニーしようとしていたところを親に見られた。両親が何故か裸で乱入してきた。気持ちよくしてあげる？

百面相をする娘を、父が抱き上げてベッドに運ぶ。狼塚夫婦は絡みをやめていて、脇によけて彼女が仰向けに寝るスペースを作っていた。

「よかったわあ。あなたもセックスに興味があるのね」

セミロングの黒髪をソバージュにした母がベッドに上がり、娘の頬にキスする。

「あつ、やつ、くすぐりたい……」

母親はキスの雨を降らせてきた。頬だけでなく、うなじやこめかみに熟れた唇の感触が連続する。性的な意味合いのない、犬がじゃれてくるようなスキンシップだった。

「はあ……さすが、若い子の肌は白いわあ……キメ細かくて、見た目からしてもちもちして……うらやましいぞお、このっこのおっ」

おじさまにオンナにして頂きました

千風が母親の反対側に来て同じように唇を押しつけてくる。姉が妹に一方的に構うような調子で、性的意味合いの薄いところも同様だった。

「んっ、だめ、そこは……ふあ、身体の力が抜けて……」

二人の美熟女は、キスをしながら胸にも触れてきた。グラビアアイドルも真っ青な巨乳を誇る年上勢にも見劣りしない瑞々しい豊胸を、女の細い十指が弄ぶ。

顔の両面にチュツチュツとかかる心地よい圧力と胸に生じる微快感で、春美の頭に霞がかかり始める。千風と母の所作は巧みで、春美を慈しむ優しさが籠もっている。

ふたりがかかりでパジャマと下着を脱がされてもなすがままだった。春美はいつしか両足を投げ出していた。寝相の悪い子供のように股間を余すところなく晒している。二十歳の女性器は、一本の毛もない無毛地帯だった。水をかけながら殻を剥いだゆで卵みたいにツルツルで白く輝いている。花卉の肉付き具合は幼女並みで、くつきりと土手を作る千風とは対照的だった。大陰唇が左右に開閉しても、薔薇色の粘膜は見えない。男をろくに知らない性器であることは一目瞭然だった。

「ん……ああ……アアアアア——！ おじさん、何をするの!？」

夢見心地が一気に醒めた。気がつくくと、春美の股間に広一の股が密着していたのだ。蜜で濡れた花卉からめしべが生えているみたいに、勃起した男性器がによつきりと顔を出している。既にコンドームを装着していた。

第二話 おじさんたちに見られながら

四十過ぎの冴えない風貌の中年が、若い娘の太腿を両脇に抱え込む。

「大丈夫……広一さんに全部任せて……お母さんもついてるわ……」

「怖がらなくていいの……大丈夫よ春美ちゃん」

「春美、お前が女になるところを、母さんと父さんに見せてくれ」

母親と千風は更に愛情を込めてキスと胸揉みを行い、父は広一の横から娘に優しい視線を送っている。

女性ふたりの愛撫は春美を脱力させる。驚きに強張った身体がみるみる弛緩していく。しかし、春美の瞳からは拒絶の色が消えない。

両親も一緒になって望まぬ性交渉をいきなりもちかけられたのも嫌だったが、それ以上には怖かった。

広一が嫌いというわけではない。千風と同じ位に親切にしてくれるので、春美は彼にも好感を持っている。問題は相手ではないのだ。

春美は処女ではない。初体験を済ませている。その初めての性交渉が酷いもので、二度とセックスなんてしたくないと思ったのだった。それ程嫌なことを迫られて、恐怖しいはずはなかった。

（どうしてお父さんもお母さんもこんなことをするの？ 千風さんも広一さんもいい人だと思ったのに……）

おじさまにオナナにして頂きました

自分の気持ちを見殺ししてわけの分からないことをする大人たちに、裏切られた気持ちになった。世界でひとりぼっちになったような孤独感が心をよぎる。胸が痛み、視界が滲み始めた。

にゅちゅ……。

若娘の悲しみをよそに、中年が正上位で組み付いた。薄い肉花卉の先端に圧迫感。伝わってくる熱さは、広一のペニスが帯びる熱。

「やっ……こないで……やめて………ああ………」

逃げたくても、母と千風のキスと胸愛撫のせいで全身に力が入らない。中年に抱えられた両太腿に感じるゴツゴツした手の感触と仄かな温かさ、そして加えられる軽い握力が、女の膂力では抜け出せないと嘲笑している風を感じる。

「んっ……狭いな………絡み付くというよりも押し潰してくる感じだ………」

亀ののろさでペニスを埋め込みながら広一。声の上擦っているのは、若い膪と合体する快感のせい。挿入が深くなるにつれ、中年の胸板が春美の視界一杯に広がる。

「いやあ、やめておじさん……許してえ………」

（入ってくる……おじさんのオチンチンがわたしの中に……！）

広一は押し潰されると言ったが、春美にとっては膪がこじ開けられていく気分だった。ぴったり閉じていた膪内が、男のペニスの形に拡張させられている。他人が自分

第二話 おじさんたちに見られながら

の中に入ってきていると嫌でも自覚させられる。

「ふう……………根本まで入ったぞ……………若い子の膣はやつぱりいいな……………セックス慣れしてないまんこの微妙な硬さなんか、期間限定のごちそうだよ……………これを柔らかく鍛えるのも堪らないんだよなあ……………ツウ！」

ぶつぶつ言っていた夫の頬を、半眼の妻がつねった。

「ウブな子にそういうことを言うとは余計に怖がらせちゃうでしょ？ いらぬこと言っていないで、やることやりなさい」

「へいへい、了解」

広一は、繋がった若い娘を真っ直ぐに見る。

「身体の力を抜いて、気を楽にね。話し合いもしないでこんなことをしたのは酷いことだけど、みんな春美ちゃんが好きだからしてるんだよ……………少しだけ、我慢して」「右と左の手のひらを開いて腰骨と尻たぶに指を沈ませる。柔らかい尻肉は抵抗せず受け止めて、指の一本一本の両端に薄い影の谷間を作る。

にゅちゅ……………ぬぷ……………ぬつぷ……………。

ゆったりした抜き差しが始まった。ペニスが膣肉に自身の感触を擦りつけてくる。粘液が間に入っているというのに、肉とは思えない硬さと火傷しそうな熱さだった。

「あ……………やあ……………ん……………」

おじさまにオンナにして頂きました

五往復もしない内に、膣内に甘い電流が走り始めた。男と繋がる嫌悪感で冷めた身体が火照り出す。依然として続けられている女ふたりのキスと胸愛撫が、再度心地よいと思えてくる。

じゅちゅつ……じゅりじゅりじゅり……じゅりじゅり……ぬふううううつ。身体の芯から脱力してくると、広一のピストンのリズムが変わってきた。腰が忙しくなく上下する。

考えなしの直線運動ではなかった。腰を引いて膣口辺りをペニスのカリで何度か擦り、その後に深々と押し入ってくる。入り口が甘く痺れて落ち着いていられなくなる。と、膣の最初から奥にかけてが長くじつくりと刺激される。

「はあ……はあ……んはあっ………んんんっ……！」

薔薇色粘膜の入り口が刺激されている時は、奥の方が切なくなる。切なさが大きくなって刺激が恋しくなった頃にくる一撃は、頭が白むくらいに気持ちいい。

春美の吐息に熱と湿りが孕み始め、あえぎ声に甘さが混じりだす。瞳に広がっていた拒絶の色が、法悦の涙の膜でぼやけている。

悪くなかった。

母とおばさん、大好きなふたりからキスと愛撫を与えられ、好感を持っていた男性に巧みな抜き差しをしてもらう。嫌だと思っていた時間は、もうずっと昔のことに思

第二話 おじさんたちに見られながら

える。

「だめ……わたし、どうにかなりそう……ああ、お母さん、千風さん、おじさん……」
「大丈夫。どうにかなっていていいんだ。おじさんがいいところに連れて行ってやる」
にゅぷう……ぱんっ、ぱんっ、にゅぷううう……ぱんっ、ぱんっ……。

抜き差しのリズムがまた変化した。今度は深々と埋め込む回数が増えている。腰をぶつける勢いも増し、肉と肉が衝突する度に太腿が緩く波打った。

ペニスを包むスキンは、春美の愛液に塗れていた。根本からすっかり濡れ光っている。自分の体液でそうなっていると意識すると、恥ずかしさで春美の身体が一気に熱くなった。

「おじさんっ、あああ……おじ、さんっ……!!」

母親と千風が春美からそっと離れたが、当人は気付いていない。正上位で貫かれながら、ペニスの出し入れをし易いように足をがに股に開くの意識が向いてしまっている。嫌がった中年男とのセックスに夢中になっているのだ。

万歳するように投げ出された両手は脱力し切っていた。入浴時に洗髪してほどない髪が頭の下で鍋敷きみたいに広がっている。

ふたり掛かりで愛撫された胸は興奮で一回り大きくなっていた。ツンと上向く頂きは勃起して、豊満な乳房を天井へと牽引している。

おじさまにオナナにして頂きました



第二話 おじさんたちに見られながら

「はあ、はあ、はああああ………！！」

じゅっぷ、じゅっぷっ、パンパンパンツツ、ぐりっぐりっごりゅっ。

中年と二十歳の娘の太腿が密着し、股間同士が絡み合う。広一は逸物を深々と突き刺したままほとんど腰を引かず、カリ首で奥の方をしつこくヤスリがけする。腰で円を描く動作も交え、膣の奥を丹念に研磨している。

「イって春美ちゃん………イっていいんだよ、春美………さあ、イクというんだ………」

低く温かみのある声で広一が話しかけてくる。膣内に生じる甘ったるい快感に頭を白ませていた春美はコクコク頷く。言われたままに、卑語を口走る。

「ああ、イキます………春美、イキます………んああっ、イクっ、はあああ、イクウツ！」
膣内の締めりが増した時、広一は腰を叩きつけるピストンに切り替えた。長く重く鋭く何度か擦り上げた直後、膣内が激しく脈打った。

「はうううンンっ！」

上気した女体が腰と後頭部を端にしてブリッジした。膣粘膜のそこかしこがトプツと愛液を吐き出して、絶頂まで導いた肉棒に浴びせかける。

「春美っ！」

猛烈な締め付けに食われていたスキンペニスを強引に引き抜くと、広一が春美の脇腹の横に移動して両膝をついた。

おじさまにオンナにして頂きました

邪魔なゴム膜を外し、ピンと伸びきったペニスを利き手で扱く。切っ先は激しく波打つ二十歳のお腹を向いている。

友人の娘、年下をリードしているというよりは、愛し合った女に自分の体液をかけて悦びを分かち合いたいという雰囲気、広一はザーメンをぶち撒けた。

どびゅっ、どびゅーっ！ どくっ、ドクッ！

「あっ、熱いっ、ああ、おじさんの精液がわたしのお腹にッ！」

带状に吐き出される牡汁。片栗粉で作った粘液塊みたいに粘っこく、おへその上方にどんどん追加されていく。

「はあっ……はあ……はあ……おじさんのせーえき……」

自然と手が伸びた。掬って、人指し指と親指に絡ませて伸ばし、鼻の先に持つてくる。強い青臭さを感じたが、不思議と嫌ではなかった。腹部に押し掛かるザーメンの熱さも重さも心地よく、もっとかけて欲しいと思えてくる。

中年男のザーメンを伸ばして弄ぶ様には、セックスを拒否しようとした面影は微塵もなかった。その姿を、実の両親と狼塚夫婦がじっと見詰めていた。

【二野辺春美の日記より】

二〇××年九月●△日。天気は曇り。

第二話 おじさんたちに見られながら

おじさんとエッチしちゃった。

一回だけでなく、二回も三回も絶頂……いかされてしまった。それをお父さんもお母さんも、おじさんの奥さんも見てるってどうよと、終わってからようやく気付いた。でも、とにかく凄かった。失神させられて今日起きた時も、気分爽快で、腰が鈍く痛むのも気持ちよくて。

エッチなんて二度とやるもんかと思っていたけれど、こんなにいいものだと思っていたら、そんなことは思わなかったと思う。

やっぱりおちんちんが小さいからいいのかも知れない。大きくなってもあのカレの半分かその位しかなかったけれど、そういうものの方がわたしと相性がいいのかも。

はあっ、思い出すとアソコがむずむずして落ち着かなくなっちゃう……また、してもらいたいと思うけど、奥さんがいる男の人をお願いするわけにはいかないし……。えっちな女の子だって軽蔑されるかも知れないし。

どうしよう。

おじさまにオンナにして頂きました

第三話 また、相手をしてもらいました

【二野辺春美の日記より】

二〇××年九月●☆日。天気は雨。

あれから七日。あのことがなかったかのように、おじさんも千風さんも普通だ。気まずくならないのは嬉しいけれど、少し……かなり物足りないかな。

最近、夜に机に向かっていると、いつの間にかあの時のことが頭に浮かんできて、身体が熱くなってくる。アソコもむずむずしてきて、我慢できなくなる。

窓を開けて夜風を浴びても、お風呂に入ってもすっきりできなくて、変な気分がなかなか振り払えない。ちよつと、勉強が手につかなくなる。

前は、嫌な初体験のことがいきなり思い出されたりして悩まされたけれど、こういうのも結構困る。

このままもう、何もなしのかしら。

溜息をついて春美は日記帳を閉じた。シャープンを置き、椅子に座ったままで伸びをする。壁掛けのアナログ時計は十時十分を回っていた。

「もう寝ようっと」

日記を書いているうちに思い出してまた反応し始めた身体を無視し、パジャマに着替えようと服を脱ごうとした。既に入浴は済ませていて、今は真っ白いTシャツと茜色を基調としたタータンチェックのミニスカート姿。残暑が厳しいので、夜に薄着をしてもあまり身体は冷えない。

トントン。

「春美ちゃん、もう寝ちゃった？」

部屋のドアのノック音に続き、千風の声がした。最近はずっと忙しいらしく、早朝に出勤して深夜に帰ってくるという生活が続いていたのだが、今日は早く帰ってこれたらいい。

「いえ。今開けます」

鍵はないのでかけていない。ここは千風の家で、相手はただの居候だから返事を待つ必要はないと思うのだけれど、彼女は絶対に勝手に入ってこない。

開けると、スカートスーツの千風と、灰色のTシャツにジャージズボン姿の広一がいた。

「あら、そういう格好だと現役女子高生って感じじゃない。春美ちゃんはもう二十歳なのに、実年齢以上に若々しくて羨ましいわあ」

おじさまにオンナにして頂きました

「そ、そんなことないです……千風さんの方がずっと魅力的だと思います……わたし、千風さんみたいな大人になりたいって思ってます」

「あはは、おだてても何もでないわよ」

白い歯を見せながら笑う千風。春美の頭にポンと手を置いて、よく梳かれた髪を軽くくしゃくしゃにする。

「ねえ、とろろでさあ、今からエッチしない？　うちの人と」

「え……ええ……!!？」

春美は瞬時に真っ赤になった。またシたいとは思っていたが、いきなり実現するのにもびっくりする。

「嫌かしら？　ひよつとして、この人下手くそだった？」

「まさか、とんでもない！　……そんなことは………あの、その……さっきの、ええー！　はそういうことじゃなくて……」

実は待ってました、などと素直に告げるのも恥じらいのない淫乱女みたいで躊躇われた。しかし、ここで断ればもう二度と相手をしてもらえない可能性もある。建前と本音が胸中でぶつかり、あうあう……などと意味のない呻きを出す春美。

広一は静かに、千風はにやにやしなからしばしウブな少女を眺めた。

「ベッド借りるわね」

妻とアイコンタクトした夫が、素直になれない春美をお姫様だっこし、ベッドに連れて行った。

「ああ……………」

求めていただけに拒むこともできず、春美はなすがままになる。

(はあああ……………こんな格好……………でも、すごくドキドキする……………)

広一に抱かれながら、春美はそんな感想を抱いた。

彼の風体はどこにでもいそうな中年のそれだった。身体はスマートな方だが、ガツシリしているわけでもない。顔は十人前。洗顔も洗髪も髭剃りも人並みにしているが、普通のサラリーマンみたいにキリツとはしていない。髪はぼさぼさで、鼻の下や顎に髭の剃り残しが散見する。

けれども、ハンサムだった元彼には感じなかった位に大きいトキメキを覚える。

これからこの人とセックスするのだと思うと、身体が火照る。寂しかった女性器の奥に切ない電流が流れ、ペニスで貫かれた時の記憶が頭の中で反芻される。その時自分はどうしていたかも。

ミシ……………

そっと仰向けに寝かされた。両腿で九十度を描かされると、膝を立てて足裏をシーツにつけさせられる。スカートがめくられて純白ショーツのクロッチが覗く体勢になっ

おじさまにオンナにして頂きました

た。春美は、抵抗しなかった。胸の鼓動は勢いを増すばかり。

「はあ……はあ……恥ずかしいです………」

両掌を自分のお腹の上に添え、顎を引き、股間の向こう側でこちらを見詰める広一を見詰め返す。熱に浮かされているような上気した頬、睫毛がほぼ一文字になり、細まった目の奥で輝く瞳は潤んでいる。

「うわあ、そりゃあ男殺しの視線よ春美ちゃん」

千風は上着を脱いでブラウスになると、春美の後ろに陣取った。彼女の上体を起こさせて、シャツを鎖骨までたくし上げると、ブラジャーを奪った。

「あ………だめです……胸が丸見えに………」

乳房がぷるんと転げ出て、ゆったりと振幅した。大きさは子玉スイカ並みで、輪郭はまあるくて球に近い。

一目見ただけで瑞々しさと張りが伝わってくる乳肌は千風よりも白く、まるで新雪の色だった。頂きに広がる鶺鴒色地帯にも、白がまぶされていて初々しい。同色の乳首はツンと上を向いて若さをPRしている。

「いいじゃないのお。若さ爆発でお見事な巨乳を、四十過ぎの短小おっさんにじっくり見せてあげなさいな。これからイイ思いをさせてくれる代金とでも思ってたさ〜」

腋の下から手を通し、千風が双胸を鷲掴みにする。しかし、彼女の手のひらでは乳

第三話 また、相手をしてもらいました

房を掌握することは叶わない。掴んだ部分よりもはみ出る面積の方がずっと広がった。広げた指が一斉に、手に余る巨乳房に浅く食い込む。乳肌に谷間が生まれ、年上女性指から力を抜くとゴムに弾かれたのと同じ具合に跳ね返される。

「表面は柔らかかで、内側にいくほど弾力が強い……ただでさえこんなに大きいのに、ほんと素敵なおっぱいを持つてるわあ……嫉妬しちゃうぞ、このこのおっ」

モミモミと揉みしだきながら、人指し指と中指の第一関節付近でさりげなく乳輪と乳首も擦る。

「ふわ……やあっ……おっぱいが熱くなって……先っぽがひりひりするみたいに痺れて……はあん……ッ」

指に圧迫される部分から、じんわりと快感が伝わってくる。微細に擦られる鶉色の肉地帯にもささくれ立ったもどかしさが募っていく。甘く胸が詰まり、思わずいやらしい吐息を零してしまう。

「春美ちゃんのここ、もう準備ができたみたいだね」

妻が若娘を弄ぶ様を見ていた夫がショーツを見詰めて静かに言う。いつの間にか全裸になっていた彼の言う通り、クロッチ部分に縦長の染みができていた。

広一はスカートの中に両手を潜らせた。腰骨とショーツの間に指を挟め、手元に引く。心地よさで脱力した春美の下半身は彼の所作に従順で、なけなしの力を使って脱

おじさまにオンナにして頂きました

がし易いように足を伸ばすことさえした。

「すっかり濡れてるね……………」

ショーツをベッドの脇に置くと、広一は両足首を掴み、足裏、膝、お尻たちにM字の軌跡を描く共同作業を強いる。

肉付きが薄く、十代中盤の少女のものと大差のないウブな肉花卉は、透明な蜂蜜でも塗りたくられたかのように濡れそぼっている。一對の花びらは緩やかな開閉を行い、縦筋に近いクレヴァスからは、男に見られる今も蜜がトロトロと零れている。甘酸っぱい汁臭もくゆらせて、発情していることを嗅覚にも知らせてきた。

「はあああ……………見ないで……………恥ずかしい……………」

春美の言葉は、本気の拒絶を意味していない。吐き出す吐息は熱っぽく、目には法悦の涙の膜がかかり、瞳にはこれからの展開への期待感が現れている。

胴底に押し寄せる外気が、奇妙な開放感を感じさせる。広一が自分の花卉を見ていると思うと、大陰唇の全体に軽い物理的な圧迫感を覚えて、子宮口がきゅんと疼く。頭の中では、広一との初体験の記憶が鮮明に蘇っていた。早くペニスで貫いて欲しいという浅ましい欲求が胸の中で大きく膨らみ、喉がカラカラに渴いている。

「さて……………」

千風が春美から離れた。スカートポケットからスキンのパックを取り出す。開封

第三話 また、相手をしてもらいました

し、封入されてあった肌色のスキンを夫に装着させる。

その様子を見ていた春美が、いよいよかとゴクリと喉を鳴らした。

「入れるよ……」

挿入準備を済ませた広一が、待ちわびている若娘の左足を肩の上に乗せる。

春美がコクンと頷く。女性器が大きく開かれた恥ずかしい体勢であるのに、その羞恥心も期待感を大きくする薪でしかない。胴底の縦割れから、新しい愛液がトロっと漏れた。

にゅふう……。

汁を垂らした女の第二の唇に、亀頭が入り込む。ペニスが放つ灼熱感が春美の股間に流れこんでくる。雄々しい脈動が、牡と牝の合体部分から膣内全体へと伝わって、これから男とセックスするのだという意識を春美に強く自覚させる。

じっくり見ると、やはり広一の肉棒は知っている元彼の物よりもサイズが劣っていた。長さはおよそ十一センチ、径は三、四センチ程だろうか。けれども、与えてくれるトキメキは比較にならない。比べるのも馬鹿らしい位。

「はあああああ……入ってくるう………んんッ……！」

小陰唇と膣口がドーナツ状に押しつけられる。たっぷり濡れているので痛みはない。粘液のお陰で感じさせられる、まるっこい圧迫感はひたすら心地いい。

おじさまにオナナにして頂きました



第三話 また、相手をしてもらいました

広一は僅かに呼吸を乱しながら膝のすり足で挿入を深める。抱え込んだ太腿の表に手を巻きつかせ、その裏側を胸板に密着させつつ、担ぐ膝の裏を耳の横まで滑らせ、不安定な体勢のバランスを強化することも怠らない。

「ふふふふ、うちの人のビキビキおちんぽが春美ちゃんのウブまんこの中にズブズブってしてるわあ……春美ちゃん、気持ちいい？　うちの人の短小ペニスいい？」
かぶりつきで挿入を鑑賞していた千風が悪戯っぽく訊ねる。

「んん……いいです……すごく……おじさんのオチンチン素敵です……はあ……おじさん、早く奥まで入れて、突いてください……堪らないんです……はあ、はうん……」

トロンとした目で春美が答え終えた時、ペニスの麓と女性器の表面が湿った音を立ててぶつかった。合体した性器を中心に放射線状に鈍い衝撃が広がり、尻たぶと太腿が波打った。

「ふう……はあ……俺の粗チンを褒めてくれてありがとう。春美ちゃんの若いおまんこもとても気持ちいいよ。全方向からぎゅうぎゅう食い締めてきて……まだまだ硬い感じがするけど、ゆっくり大人まんこに鍛えてあげるからね……」

「ああ、鍛えてください……おじさんのオチンチンで、わたしのおまんこを大人にしてください……」

おじさまにオンナにして頂きました

挿入されただけで夢見心地になっている春美は、意味を考えずに追従する。広一は頷くと、腰を使い始めた。

蝸牛の歩み並みの遅い抜き差しが始まる。二十歳の膣肉は前回以上にペニスに吸い付き、愛液を浴びせかけた。三往復もしないうちに、ペニスは根本から濡れそぼつ。「あんっ……ふあ……やあん、もつと早く、早くじゅぶじゅぶってしてください……」すぐに体温が上がる。カリが膣ヒダを磨く度に、心地よい痺れが脳まで届く。しかし、もつと強烈な快感を得られることを知る春美には物足りない。更に強い刺激が欲しくてはしたなくおねだりをする。そんな心情が意思とは無関係に腰を支配し、くねらせる。

「あわてないで。ゆつくり楽しもうね」

春美がもどかしそうに腰を揺らし始めた様子に、広一は顔を綻ばせた。宣言通りにじつくりと、未熟な膣を立派な快楽器官へ育てる意思を込めて肉棒の抜き差しを繰り返す。

膣口をカリで擦り、焦れたそうに膣内が微痙攣した時を狙って深々と貫く。やはり、ゆつくりと。

「あああああ………はああああ………これ、いい………もつとおお………」

春美の鼻先でバチバチと火花が散る。瞬間的に頭が真っ白になって、甘く息が詰ま

第三話 また、相手をしてもらいました

る。同じことをもつと味わいたくて、広一の下腹に尻たぶを押しつけようとするが、彼は太腿を抱えたまま腰を引いていなす。飽くまで、主導権を渡さない。

「はあっ、はあっ……はうんんん！ んんっ………あぁ、あ……あぁうううッ！」
焦らしを交えた不規則なピストンは、広一が支配するペースで春美の身体を燃え上がらせる。切なさや充足感をランダムに与えられる不自由が、深い陶醉を与えてくる。いつしか、春美はなすがままになっていた。どんなに頑張っても自分の思い通りに快感を貪れないものの、このままでも悪くないと思い始める。そうとは気付かないまま、広一主導のセックスに慣らされていく。

彼女がすることは、与えられる快楽を味わい、快感のままに腰と膣をビクつかせることだけ。すっきり、欲望までもをコントロールされる。

じゅっぶっ、コッソ……ぱんっ、コッソ……。

「あっ、奥っ、奥に当たった……んんっ、あ、当たってるう………あぁあアッ！」

子宮が降りてくると、広一の腰の振りが変わった。ペニスの根本と肉花卉の先端を密着させる。亀頭の先が子宮口にべったりつくくと、先っぽで最奥を押し込むように捏ねる。二度三度と尻での字を描いたら、腰を引いてカリで浅瀬を引っかき始め、膣内が物欲しそうに蠢くとまた子宮口を捏ねに戻る。

「すごっ、いい、んんッ……はあはあはあ、ああアッ！ お、おじさま、いいっ、お

おじさまにオンナにして頂きました

じさまのオチンチンで子宮の入り口堪らないッ」

子宮口をペニスで責められることが記憶の扉を開く。春美はかつて、広一の逸物よりも長大なペニスを持った元カレに子宮口を責められたことがあった。あの時は痛いだけで、今みたいな多幸福感は感じなかった。同じ風にされても、する人が違うところも違うものなのかと、胸の片隅で思う若娘。

「あつ、あつ、おじさま、イクっ、わたし、イキそうですっ」

横向きに寝そべったまま髪を振り乱し、切羽詰った声で絶頂が近いと自己申告する。シートに投げ出された手のひらが、震えながらグーパーを繰り返す。

白くきめ細かい肌はすっかり赤くなり、薄い腹部は荒い呼吸を反映して激しい沈降を繰り返している。チューリップみたいに捲れた腰のタータンチェックのスカートも、風に煽られているみたいにひらひらしている。

膣は入り口がきゅゅと締まり、奥は反対に広がっていく。牝の子種を一滴も多く呑み込んで、一匹でも多くの精子を卵子に向かわせようとする牝の反応を、セックスを嫌悪していた二十歳の娘が起こしている。

「ああ、イクといいよ春美……俺にイキ顔を見せてくれな……ほら、こうされるといいだろ？ 遠慮なくイクんだ」

「そ、そんなイキ顔だなんて……ああ、駄目です、そんな恥ずかしい顔は見ないでく

おじさまにオナナにして頂きました



第三話 また、相手をしてもらいました

広一にも限界が訪れた。痙攣する膣に食い締められる勃起ペニスを引き抜く。すると、妻が脇から手を伸ばしてスキンを取り払った。

「か、かけておじさま、わたしに射精してえ……！」

ギンギンにそそり立ったペニスを利き手で扱きながら、広一は穂先を春美に向ける。うっとり顔でザーメンぶっかけを許してくれた彼女へ、遠慮なく射精した。

びゅーっ！びゅーっ！どびゅっ、びゅっ、びゅっ！

噴水じみた勢いで噴出する濁り白の帯。興奮で勃起した鶉色の乳首に、赤く染まった瑞々しいふたつの乳房に、激しく浮き沈みするぜい肉のないお腹に、女子高生を連想させるチェック柄のミニスカートに降り注ぐ。広一はしつこく逸物を扱き続け、最後の一滴まで春美にかけた。

「はあ……はあ……んくっ……おじさまのせーえき……はあ……」

露出した肌や衣服に押し掛かってくる精液の塊。その重みも、熱さも心地いい。鼻を蹴り飛ばすほど強烈な生臭さに包まれても、それさえも心を陶然とさせる薪だった。中年男の粘っこいザーメンを身体にかけられているというのに、二十歳の若い娘は嫌な顔ひとつしない。それどころか、恍惚とした顔でされるがままになっていた。

全身が断続的に細かく痙攣し、先刻までペニスをくわえ込んでいた大陰唇は肉棒の径の形を描いている。その合わせ目からは滝のように愛液が流れていた。

第四話 裸の付き合ひ

翌日。その日も千風の帰りは早く、春美は一緒に入浴しないかと誘われた。裸を見られたことがあっても、他人と風呂に入るのに抵抗はあったが、彼女のことは好きであり、大家の言うことでもあったので受けることにした。

「やっぱり春美ちゃんはいいい身体してるわね〜」

頭の上に畳んだタオルを置き、身体洗いと洗髪をすませてゆったり湯船に浸かっていた千風が感心する。春美は入れ替わりで身体を洗っているところだった。

「恥ずかしいです……あんまり見ないでくださいよお」

真っ赤になる春美。正面はいわずもがな、後ろ姿もたつぷりとしたお尻と砂時計めいた身体のラインを褒められるし、横を向けば乳房の突き出し度合いに言及される。

「若くて綺麗で気立てもいいコは、見てるだけで若返る気がするわあ」

十分視姦した後で、ホクホク顔でそんなことを言ってくる。

「そんな、千風さんだつてとても綺麗で素敵じゃないですか。わたし、羨ましいです」
お世辞ではなかった。もうすぐ四十路だというのに、千風の身体は若々しい。肌のツヤや乳房の張り具合などはハタチの春美に若干劣るが、尻や太腿など男が好む部位

第四話 裸の付き合い

には脂がのり、くびれ部や手足など、あるとプロポーションを醜くする場所には無駄肉がない。

「どうしてそんな風に美貌を保っていられるんです？ 教えて欲しいです」

「やっぱりセックスかしらねえ」

さらりと言った。

「せ、せつくすですか？」

月並みに特別な体操や美容薬の類かとは思ったが、その答えは想定外の範囲外だった。目を丸くする春美。

「気持ちよく運動して汗を流すのは、ストレス解消や快眠快食の元だから。それが一番みたい。食事や睡眠が十分にとれないと、仕事や日常生活に影響して余計にストレスをしょいこんじゃうことがあるしに、そうなるともう悪循環よ」

「なるほど」

「それに、男とやっていると女性ホルモンがドブドブ出て、そう言う意味でも身体の調子がよくなるしー。あ、これは実体験に基づいた私個人の意見で、医学的に正しいかは知らないけれどねー。あと、男の目を気にして身だしなみに気を使うようにもなるわあ。仕事する時も身繕いに気を遣うけど、男の気を引くために鏡を見る方が楽しいでしょ？」

おじさまにオンナにして頂きました

「はあ、そうかも知れませんが……」

好きな男の歡心を得るために、おしやれに凝った経験はあるので、春美は取り敢えず頷いた。

ただ、その過去は今の春美には忘れたい苦い思い出だった。思い出して、ほんの少し陰鬱な気分になる。

「あら、納得できないかしら。あなただってそうでしょ？　うちの旦那の目を気にしてるじゃない」

勘違いして千風が続けた言葉に、春美はびっくりする。色々とお世話をしてくれているのでいい人だとは思っているが、興味を惹こうと色目を使っているつもりは毛頭なかったのだが。

「おじさまを？　まさか、そんなことはないですよ」

振り返ってさま付けしてきた瞬間に口角を吊り上げる千風。得意顔で続ける。

「髪、毎朝梳くようになったじゃない。お風呂上りや寝る時も、枝毛にならないように気を使って丁寧にやってるようだし。食事当番の時の料理だって、前はご飯に汁物にお店の惣菜だけだったけど、料理本片手に手間隙かかるのを好んで作って……あいつが箸を進める様子を見る、不安と期待の入り混じった瞳といったら……ああ、おばさん、思い出すだけで赤面しちゃうわあ」

第四話 裸の付き合い

(うう……細かいところまでよく見てるなあ………)

言われてみるとその通りだった。ひよつとしたら、近頃なんとなく色っぽい下着に興味を持ち始めたこともそれが原因なのかも知れない。

だが、心境や行動の変化を見破られていたとすると、また違う問題もある。

「ああ……えと……そうですね……でも、すみません……他の女が夫に興味を持つてるのは面白くないですね」

自分が千風の立場だったら、春美のような女を泥棒猫と思うだろう。千風と気まづくなるのかと思うと、心の中に厚い黒雲がかかる心地だ。

「あつははは……いいのよ、あんなヤドロクが人様の役に立ってるんなら、一緒になった女としては嬉しい限りねえ」

あつげらんとした彼女の返事が、不安をあつさり霧散させた。

「ほんとですか？」

「ええ。それに、申し訳ないのはこっちの方。あなたがシたいって思っただけで欲求不満になっただけは気付いてたのに、おあずけしちやっで。本当なら毎晩でもさせてあげたいんだけど、私が仕事で忙しくってねえ。親御さんとの約束で、私が立ち会わない限りはさせちゃいけないことになってるのよ。うちの旦那は、けっこおな支配したがりで、ストッパーがいないと相手をセックスのことしか考えられない女にしちや

おじさまにオンナにして頂きました

う馬鹿だから」

「はあ……ん？ ……え？ ……うちの両親との約束!! なんですかそれ!」

「まあ、前途ある娘を心配する気持ちの現れだから。鬱陶しいだろうけど、親孝行だと思つて我慢してね」

拝み倒すジェスチャーをする。

「いえ、そうじゃなくて、ひよつとして、あの時だけでなく以後もエッチしてることをうちの親は知ってるんですか？」

「うん。そもそも、うちの人と春美ちゃんがエッチするようになったのは、ご両親が頼み込んできたからなのよ。うちの娘が男関係で失敗して、このままだと男性不信のまま一生独身で過ごすんじゃないか。いつまでもショックを引きずつて、一人立ちもできないかも知れないって。だから、セックスのよさを教えたりオンナとして鍛えてやつて、生きる楽しさや男に対する前向きな気持ちを与えて欲しいと話していたわ」

「そうだったんですか……」

両親に内緒で男と付き合つて処女を捧げたことも、それが原因で塞ぎこんだり、色々と上手くいかなかったことも、全てお見通しだったらしい。

そして、そんなダメな娘を変わず愛してくれている。

「勘違いしないでね。親御さんは、あなたのことを想つてるのは間違いないから。生

第四話 裸の付き合い

きてる限りはあなたを守ってくれるでしょう。でも、ずっと年上なのだからどうしてもあなたを残して先立ってしまう可能性が高い。その時に、苦楽を共にする家族がない、独りで生きていくこともできない。そんなだと哀しいのよ。私に子供はいないけど、想像はできるのよね。あなたはどうかしら？」

「分かります……」

もしも自分に子供がいて、惨めな人生を送るのだとしたら想像するだけで胸が苦しくなる。受験に失敗し続けたり、男にのぼせて失恋し陰気に日々を過ごしていた娘に對しても、あの父母は心配してくれている。同じ立場になったら、自分は同様のことをできるだろうか？ 考えているだけで、眉間がツーンとしてきた。

「まあ、それはさておき。セックスの味を占めても、毎日を真面目に暮らしている春美ちゃんにご褒美をあげようと思います」

千風は浴槽から上がった。適当に身体を振って水気を切ると、脱衣所に向かう。すぐに戻ってきた彼女の手には白いビニール袋が。

「なんですか、それ？」

しんみりとしていたのに台無しだなあ、などと思いながら千風と同じように浴室用マットの上にしゃがみこむ春美。

眼前に広げられたのは、透明袋に封入されたバイブとペットボトル入りの透明ロー

シヨンだった。

バイブは、亀頭は赤黒で竿部は肌色と色分けされていて、表面は粘液を纏う生き物じみたテカリを放っている。そして逞しい。カリの張り出し具合も、浮き出る血管の迫力も広一のペニスとは段違いだ。見ているだけでムラムラしてくる。

「こ、これは……」

「なかなかのもんでしょ？ これをあげるわ。好きな時に欲求不満を解消してね」

「いや……笑顔でそんなことを言われても、どう返事をしたらいいのか……」

「使用後は自分の身体もバイブもよく洗うこと。バイブは、ボディソープやハンドソープをつけて手洗いするのが基本よ？ 洗浄後は乾いたタオルで水気を取って陰干しね。水気を残すと雑菌が繁殖して危険だし、日干しすると劣化が早まるの。保管する際は、ラップですつかりくるんだりこの封入袋に入れておくといいわ。場所は日陰ね。ローシオンは冷暗所で保存する物だから」

スラスラと言ってくる。言い慣れているんだろうか？

「どうしたの？ ひよつとして、これが何かとか使い方が分からないとか？」

こちらを見据える千風の目が奇妙な鋭さを帯びている。ふと、肉食獣がいたいけな獲物に舌なめずりしている光景が頭に浮かぶ。

「なら、教えてあげる……」

第四話 裸の付き合い

妙に低くドスの効いた声だった。ぼつてりした唇が牡丹色を濃くしている。赤くヌメ光る舌が今、下唇を舐めた。

「いえいえ！ わたしも分かりますから。千風さんは好きですけど、同性でするのはちよつと……」

「あら残念。あなたほど若いコとしつぽりぬっぷりするのは久しぶりだから、胸がときめいちやっただけけれど……そうだ、バイブはおいといて、ペニバンなんかどう？ 初めは痛いかもしれないけど、大丈夫すぐに気持ちよくなるから。うちの旦那とするよりもいい思いできるかもよ？」

ペニバンとは、ビキニパンツの股間部にバイブが取り付けられたジョークグッズのことだろう。それを wield すれば、女でも人工の逸物で女を責め立てることができる。昔の男と付き合っていた頃、インターネットで男好きする下着を探していた際に見たことがあった。

(千風さんがペニバンかあ……)

装着姿を想像してみる。伝法寄りの性格と、女性の魅力たっぷりのスレンダーな身体。千風には似合う気がした。並みの男よりもよっぽど男らしい彼女になら犯された気もちよつとはしてくる。例え野獣のように振舞っても、彼女のことだから最低限の気遣いは忘れないだろう。そういう安心感もある。

おじさまにオンナにして頂きました

「遠慮します……」

だが、やはりやめておいた。ただでさえセックスに嵌りそうになっているのに、これ以上深い世界に入り込んだら後戻りできないかも知れない。

「そう。けど、自慰は恥ずかしながらしときなさいね。皆することなんだから、気にしちゃだめよ。しないで悶々として、勉強が手につかなくなる方がよっぽど問題だから」

湯船に戻る千風。肩まで浸かり、頭の上にタオルを乗せながら続ける。

「あと、女の身体を鍛えといて損もないしね。男と楽しんだり、男を引っ掛ける時に便利だし、女だけが持つてる最後の武器でもあるし。なんだかんだあっても、男なんて誘惑上手で具合のいい女には勝てない馬鹿な生き物だからねえ」

しみじみいう様子には妙な説得力があった。

「できればお尻も磨いとくといいわ。尻好きってのは意外といるもんよー。うちの旦那もそっちもいける口だし」

性関係の会話はそれきりだった。あとは他愛ない話で入浴時間を過ごし、春美は就寝した。バイブとローションは受け取っていた。それは以後、使い込まれる。

第五話 おじさまを誘惑しちやつた日

【二野辺春美の日記より】

二〇××年十月●×日。天気は台風。おじさまとセックスしてから十日目。うたた寝したらまたおじさまの夢を見た。わたしは、ベッドに仰向けになっはしたなく足を開いていて、その間に入ってきたおじさまのオチンチンにたくさん可愛がられていた。

羨ましい。目が覚めると、下着がベトベトになっていてアソコもキュンキュン疼いていてもたってもいられなかった。

もらったバイブとローションで遊んだけれど、やっぱり欲求不満が残ってしまふ。している最中も終わった後も、おじさまにしてもらった時みたいなの、何とか爽快感というか、満足感というか、カタルシス？ がないからだと思う。

はあ……おじさまとセックスしたい。この頃は夜だけでなく昼間もそう思うようになってきた。食事の時とかにおじさまを見るだけで、身体が火照ってくる。

これじゃあ、本当に勉強が手につかなくなるかも……うん、そうだ。また受験に失敗したらだめだから、おじさまとセックスしなきゃいけないんだよ。

おじさまにオンナにして頂きました

でも、おじさまはしてくれない……襲ってくれても嬉しいのに、全然手を出してくれない……よし、こっちから誘惑してその気にさせちゃえ。千風さんも、男の人は女のそういうのに弱いって言っていた。

恥ずかしいし、うちの両親とおじさまたちの約束があつたりするけど、このままだと勉強ができないから仕方ないよね。

そうと決まれば、誘惑の仕方を考えなきゃ。

「おじさまあ……」

鈴が転げたような澄んだ美声は、男への媚を孕んでいた。

その日の午後八時。春美は広一の書斎を訪れた。本がバラバラ詰められた木製の本棚やスチールデスク、パソコンラック、ノートPC、デスクトップPCなどが整然と配置されている、七畳ほどの部屋だった。

広一は黒いシャツに象牙色のスラックスという格好で仕事机のデスクトップパソコンに向かっていた。

春美が求める広一は、四十過ぎの中年である。冴えない風体の細身の男。晴れていた内に散髪してきただけに顔はツルツルで髪も短くサッパリしているが、普段は頭をぼさぼさにして無精髭を生やしている。普通ならばとても、二十歳の娘が焦がれる相

第五話 おじさまを誘惑しちゃった日

手ではない。

「なんだい、春美ちゃん」

座ったまま椅子の回転機能を利用して振り返る広一。春美の心臓が大きく跳ねた。彼女は意味不明な英文が長々とプリントされたありふれた白い長袖シャツを着て、小豆色を基調としたタータンチェックのミニスカートを穿いているのだが、誘惑の一手として下着はつけていない。

シャツはタイトミみたいに肌に密着しているので、ほとんど球形である乳房の輪郭がクッキリと浮かび上がっている。春美のバストサイズは九十一センチFカップである。ブラジャーを着けていないため、起立した乳頭の形も明確に浮き上がっており、発情しているのが丸分かりだった。春美の勃起乳首は乳房のサイズに見合った大きさと、子供の小指ほどはある。

（ああ……ドキドキする……恥ずかしいけど、見て欲しい……）

果たして。広一は若い巨乳に、瞬きも忘れて見入った。彼が見てくれていると思うと、乳房の至るところに鈍い圧迫感を感じ、乳頭には手指の爪先で触れるか触れないかのタッチでつつかかっているような刺激を覚える。春美の胸に仄かな甘い痺れが堆積していく。

「今、お仕事でしたか？」

おじさまにオンナにして頂きました

胸全体に生じている乳悦を心地よく思いながら、広一へ近づく。隣に立った。広一は春美のバストと顔を交互に見比べる。

「ん、そうといえはそうだったけど、正確にいうと休憩してネットゲしてたところ」
ネットゲとはネットゲームのことだろう。春美がモニターを覗き込むと、家庭用ゲームのRPGでもよく見られる、町中で大勢のキャラが行き交うグラフィックが表示されていた。BGMもSEも全然聞こえない。ミュートにしているのだろう。

ゴクツ……。

すぐ隣で生唾を飲む音。音源は広一だった。春美は、心の中で快哉を上げた。おじさまは自分のペースに嵌ってきていると。

春美が屈んでモニターを見ているので、広一のすぐ横に九十一センチFカップの谷間がぶら下がっている。シャツの襟ぐりが大きいので、きめ細かくて白に近い肌色をした乳肌の上乳同士がおしくらまんじゅうしている様子がよく見えた。

このシャツは肌に密着して、ブラジャーやストッキングと同じく身体のラインを美しく見せる補正機能も持っている。豊満な乳房の盛り上がりようは、見せるだけで男の劣情を刺激する。瑞々しい巨乳の谷間を見せ付けるのも春美の計算の内だった。

加えて、入浴を終えたばかりの春美からはハツカの匂いめいた嗅ぎ心地のいい匂いも漂っている。ボディソープとリンス入りのシャンプーの匂いだ。匂いが殺しあわ

第五話 おじさまを誘惑しちゃった日

ないよう近い匂いの物を意図的に選んで身体を清めたのも作戦の一環である。

髪は完全に水気を切り、電気器具でソバージュをかけ直している。耳の前を通して鎖骨に垂らしている後れ毛も、新品のリボンで綺麗に束ねた。シンメトリーのバランスが取れているかも鏡で何度も確認している。抜かりはない。

「じゃあ、おじさまあ………」

じっと見詰める。恥じらいと欲情が入り混じった神妙な表情で。これも、誘惑を決意してから何度も練習したものだった。

「わたしと、セックスしませんか？」

返事は待たない。若い娘は中年男の左手をとった。突き出る乳房を触らせる。彼の手の甲に自分の手のひらを添えて手元にグイグイ押し付ける。手のひらの真ん中に乳首を触らせているので、押させる度に瘤った乳頭が乳房の中に押し込まれた。

二十歳の肉弾巨乳の弾力を味わわせると、ゴツゴツして温かい感触が胸に染みこんで、胸の内側から体温が上がってくる。

指に引っ掛けるように乳首に触れさせ、硬くなっている乳首を右へ左へと転げさせた。根本から倒される度に、乳頭から胸の中心に向かってヒリつく甘い電気が生じ、快感で背中が仰け反る。

「ん……おじさまとセックスしたいって思うと、わたしの胸はこんなにはしたなくな

おじさまにオンナにして頂きました

るんです……こっちもで……す……はあ……」

広一の空いていた手をとって、スカート内部へと招き入れた。

「分かりますか？ わたしのあそ……おまんこ、ぐちよぐちよでしょ？ おじさんのオチンチンのことが恋しくて、夜泣きしてるんです……夜だけでなく昼も……あんっ、ああ、おじさまの指が、わたしの中に入ってる……あ、そこ、いいっ……ンンッ！」

とうとう、広一が能動的に動いてきた。無骨な手のひらを下着みたいに股間に貼り付けて、恐らくは中指を入れている。第一関節と第二関節をうねらせて、指全体をそよがせる。

発情汁で隅々まで濡れている膣肉も、経験の少ない若い女の武器である強烈な締め付けを駆使して、指一本を歓迎している。ペニスにするのと同じ位に強い締め付け。膣は厚い筋肉の筒であるだけに、重厚な圧迫感も孕んでいた。

「柔らかくて肉厚で……春美ちゃんのおまんこは名器だよ……」

「ああんっ、おじさま、いいですっ、おじさまの指で、二十歳の発情おまんこをかき回してください……っ」

指の指紋で膣ヒダを引っ搔かれると、妖しい寒気が背筋を駆けていく。第一関節から上が、蛇が鎌首をもたげるみたいに強く引っ搔いてくる度に、鮮烈な電気が頭頂からお尻までを打ち据える。

第五話 おじさまを誘惑しちゃった日

膣内部の熱がゆっくりと上昇していく。大いに溜まっていた肉欲も少しずつ膨らんで、ペニスで可愛がられたいという欲望に駆られて、他のことが考えられなくなってきた。

むちゅ…：ちゅむっ、れるお〜、はむっ…。

（おじさまが唇を…：わたしにキスしてくれた！）

若い娘の誘惑に、中年も我慢の限界にきたらしい。鼻息を暴風並みにして、自分から春美の唇へと自分のそれを密着させてきた。

胸に押し付けられていた手も、五指を広げてムニムニと若い弾力を楽しんでいる。

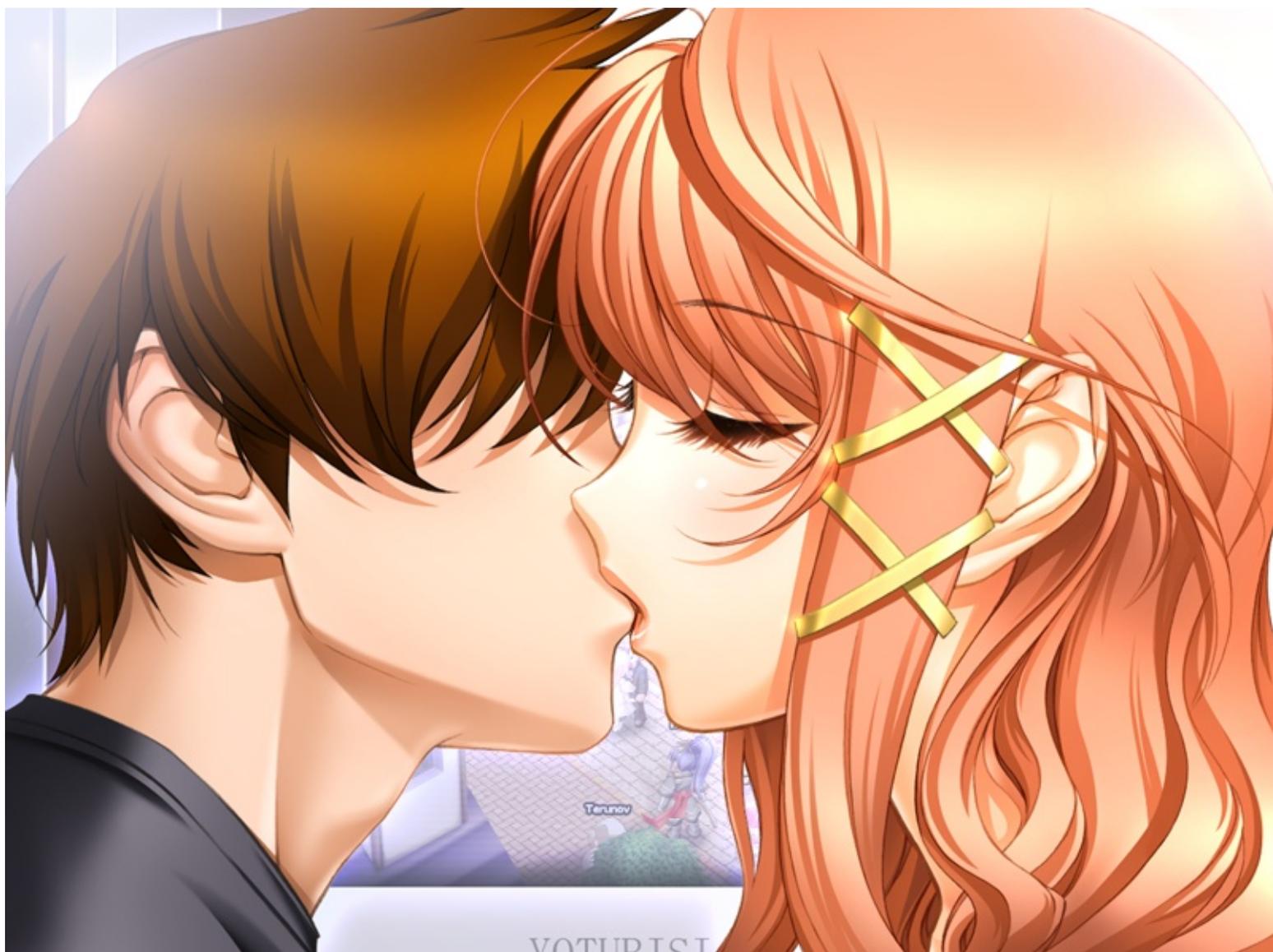
秘所にまさぐっていた指は、ペニスを抜き差しするのと同じ調子で膣内を研磨して、熟れ途中の女粘膜の感触を謳歌しながら、拇子球で陰核の真上をリズムカルに押ししていた。

キスも積極的だった。春美の舌に自分の舌を螺旋状に絡め、唇を使ってはみ、顔を斜めにして唇同士を密着させては唾液を吸い込んで喉を鳴らす。

右巻き、左巻きと舌に舌が絡む感触は頭をぼーっとさせた。牛が牧草をのんびりむ調子でハムハムと咀嚼されると頭の中に鋭くて甘い電気が走る。嚙下音に鼓膜を叩かれながら唾液を吸われると、視界が真っ白になった。

陶醉に見舞われる中、春美も動く。鼻をスンスン鳴らしながら、中年男の舌使いに合わせて自分も舌を絡ませ、彼が唾液を吸い飲んで一息ついた時に自分も彼のツバを

おじさまにオンナにして頂きました



第五話 おじさまを誘惑しちゃった日

吸引する。他人の、しかも冴えない中年の体液を胃の中に流し込んでいるといふのに、春美の顔は恍惚としていた。ただでさえ垂れている目尻が、重力に引っぱられているかのようには弛んでいる。

「おじさまあ、おまんこお、おまんこしてください……もう堪らないんです……」
真面目な娘が、卑語を口にして中年を誘う。チエツクのスカートから伸びる白めの両腿の表面に、膝へ向かって愛液の筋が幾つも走っている。

「いいよ、春美。おまんこしようか」

ちゃん付けではなかった。広一の眼差しは、若い娘を導く教育者の目ではなく、性を擦り合わせ合おうと認めた牝を見る牝のそれだった。普段はぼんやりしている瞳に、欲望の炎が燃え盛っている。

変化を見取った春美の心がぱあっと明るくなった。彼女も、自分を貪ろうとしている牝を濡れた目で見返す。

広一は一旦離れるとすぐに衣服を脱ぎ捨てて全裸になった。垢抜けない顔貌とは裏腹に、歳の割には細い身体つきが露出する。

（はあああ……おじさまあ……こんなにスマートだったの？）

考えてみれば、こんなにじっくり裸を見るのは初めてかも知れない。セックス相手に選んだ中年男を、格好いいかも、と少し思った。

おじさまにオンナにして頂きました

そして、筋張った太腿の間にそそり立つペニス。こちらはやはり小ぶりだった。十センチほどの長さに、四センチ前後の径。勃起してそれ位だった。

亀頭も全然皮を被っていない。カカリの下まですっかり露出している点は立派なもの、サイズ面では、処女を差し出したあのカレとは大人と子供程の差があり、広一は弁護できない程の完敗だ。

しかし、亀頭のテカリを放つ赤黒さと、傷つけて放置したバナナのような竿の皮の黒ずみ度合いは広一の方が遥かに勝っている。ボコボコ浮き上がっている青紫の血管も年季を感じさせる。

いかにも経験豊富な牡の逸物という感じで、セックスを拒絶していた小娘を骨抜きにできた説得力を滲ませている。おへそ寸前まで反り返る力強さは、旺盛な精力の現われか。いったい何人のオンナで磨いてきたのだろうか？

(はあ、はあ……ああ、このオチンチンでセックスできる……セックスできるのね)

春美も邪魔なシャツとスカートを脱ぐ。布から解き放たれた巨乳がブルンと縦に揺れて定位置につく。鶉色が濃くなった乳輪はぷっくりとドーム状に膨らんで、中央で起立する乳首も濃厚な鶉色に染まりきってビクンビクンと小刻みに震えている。

露出した股間も、牡棒を求めて準備万端だった。過日に幾度も中年男の股間をぶつけられた刺激で肉付きを増し始めた大陰唇は、ゆったりと左右に開閉している。男性

第五話 おじさまを誘惑しちゃった日

器の摩擦を甘美にする潤滑汁をトロトロと流しながら、肉棒の進入を待ちわびている。

「そうだ。俺のチンポは今は春美だけの物だよ。好きにできるんだぞ？」

安物のソファに座り、太腿を肩幅に展開して背もたれに背中を預ける広一。春美の目は、股間にそびえる人並み以下のペニスに釘付けになる。

（おじさまは、自分で入れろって言ってるんだわ……）

ドンと構えて動かない広一を見て、春美は判断した。自分から男のペニスをくわえ込むなど、それでは淫乱女ではないか。真面目な彼女は躊躇う。

（でも……ようやくセックスできるのに、このチャンスを逃すなんてできない……あんなにいやらしい誘い方をしたのは、セックスするためなのよ……）

鎖骨の合わせ目の前で握り拳を作って頷くと、ふらふらと広一へ近づいた。思ったよりも硬い両肩に手を置くことでバランスをとりながら、真上からアプローチして自分の股間を中年のそれへと近づけていく。

鮎色に色づいた肉花卉の縦裂から愛液がポタポタ滴る。春美の体温を奪って外に漏れた汁は、剥き出しの亀頭の先端に落ちる。広一の逸物はクリームでデコレーションされるケーキのように、若い娘の欲望の汁でコーティングされていった。愛液を浴びせられるペニスも気持ちよさそうに脈打っている。

「お、おじさま……このまま入ってくれますか？」

おじさまにオンナにして頂きました

「ああ。俺も春美の中に入りたい。春美の若いおまんこ肉に包まれたいな」

「は、はい！ わたしのおまんこも、おじさまの……おじさまだけのものですからっ」
にじゅううううう……！！

大事な部分を明け渡したいと思わせた男に言葉でも求められるのは嬉しかった。ドロドロした欲望が渦巻いていた胸中に、初恋にときめく乙女の初々しい喜びが混じる。それに背中を押されながら、二十歳の娘は中年男の短小ペニスを啜え込んだ。

「おじさまのオチンチン……ああ、おいじさまのオチンチン……！！」

槍の穂先のように尖った先端が、ぴったり閉じていた経験少ない膣内をこじ開けて、外に大きく張ったカリ首が媚肉筒内を自身の大きさに拡張する。浮き出る血管で肉ヒダを擦りながら竿が後を受け継いで、膣内が閉じられなくしていく。そうして、若い娘の膣は百戦錬磨の牡棒を包み込む。

「熱いいいい……あはああああ……気持ちいいっ……！！」

広一のペニスはやはり熱い。熱波を放っているかのような熱感が、火照っていた膣肉を熱く燃やし、肉道だけでなく身体全体にも広がっていく。

カリで膣肉を擦られる度に、鼻先で幾つもの星が飛び散る。むず痒さを濃縮したみたいなたい甘ったるい快感が背筋をゾクゾク震わせる。

パアアアンツ……！！

第五話 おじさまを誘惑しちゃった日



おじさまにオンナにして頂きました

春美の尻たぶが、広一の太腿とぶつかった。勃起ペニスをすっかり呑みこんだ瞬間だったが、先端は子宮口に届いていない。迎え入れている側の感覚からすれば、亀頭あとひとつ分だと思ふのだが。

「あ、はああ……もう少しっ……んっ……あとちよつとお………あんっ……」
にゅじゅっ、にゅぷうっ、ぱんっ、にゅぶうっ、ぱんっ、じゅちゅっつ。

棚上の菓子を取ろうとびよんぴよん飛び跳ねる子供のように、春美は尻を弾ませだした。肩を掴んでいた手を広一の首の後ろまでスライドさせてそこで組む。彼の頭を自分の顔の横に抱きながら、自分勝手に動く。

「あんっ、あっ、おじさまのオチンポ、もう少しで奥まで届くのにっ、あ、あんッ！」
最奥まで肉で満たされない飢餓感はあるが、牡棒でみっしり埋められている部分の充足感は申し分ない。一ミリでも奥へ届かせようと腰を揺すりながら、中年のペニスを自分好みに擦らせて膣快感も貪る。

「春美のおまんこ、何回かしたただけにかなりこなれてきたな。肉ヒダがねつとりと絡み付いてきて、春美が腰を使う度に凄く気持ちいいよ。引き抜く時は亀頭の先まで吸い付いてきて、入る時のカリの擦り甲斐も堪らない。鍛えてきた成果がでてるな」

右の尻たぶを握り、広一も腰を使い出した。ソファアのスプリングを最大限に利用して、下腹部を勢いよく射出する。中年と若娘の股間同士が宙空でぶつかり合い、濡

第五話 おじさまを誘惑しちゃった日

れた肉同士が打ち付け合う甲高くて粘っこい水音が周囲に響き、何滴もの愛液が衝突地点を中心にして放射状に飛び散った。

牡の雄々しさを味わわせるぶつかり合いは、春美の頭の芯を痺れさせるほどに甘美だった。身体の芯を揺さぶる快感が、激突地点から頭を抜けていく。もつとこれを味わいたくて、もつと気持ちよくなりたくて、二十歳の女は中年と息を合わせて尻を跳ねさせる。

「あつ、あつ、届いてるっ、おじさまの先っぽ、わたしの子宮口にきて、んアアッ！」
恋人同士がするように繰り広げられる共同作業は、両者を一層昂ぶらせた。ペニスが一回り大きくなると共に子宮が下降して、両者が出会いを果たす。

すると広一の腰使いが変化する。尻たぶを握る手に力を込めてガツシリ掴み直し、春美を押さえ込むと亀頭の先で子宮口を捏ね始めた。腰掛けるソファアをギチギチ鳴らしながら尻でのの字を描き、密着状態で子宮口を強く重く挟む。

「ああアッ、だめ、おじさまっ、それよすぎでダメええええ！」

膣内どころか身体全部がカアッと燃え上がる。肉の穂先で捏ねられる震動は子宮までも揺さぶって、信じられない多快感を味わわせる。鮮烈な快感電流が背筋を駆け抜けるのも堪らなかった。

若い娘は涙を流してよがっている。駄目と言いつつ、広一の腰裏に回されたしなや

おじさまにオンナにして頂きました

かな右足が、もつと密着して蹴りたいとばかりに彼の下半身を自分へと引き寄せる。中年の右足の横を通って床の直前まで垂れている左足の爪先は丸まったり開いたりを繰り返す。

最奥を亀頭でねぶられる間中、背中もビクビクうねる。瑞々しい巨乳は上下左右に揺れっ放し。ソバージュの綺麗なセミロングも踊り、汗がキラキラと飛び散る。

(すごいっ、すごいっっ、これよ、これが欲しかったのおお！)

大恩ある両親と、大好きな千風と広一が自分の将来を思っただけで交わした約束。それを守るためにした、淫具を渡すという千風の努力。それらを台無しにして得た快樂は、素敵なものだった。恋人でもなく、自分の倍以上の年齢の男性とセックスしていると、いう背徳も加わり、大切な人々に働いた裏切りは蜜よりも甘く真面目な娘を蕩かせる。「ああッ、あんッ、お、おじさま出るのね、射精するのねッ、あん、んんんッ！」

子宮口を握っていた亀頭が膨張し始めたのが分かった。同時に、膣を内側から押し込んでいる竿も肥大して、グイグイと膣壁を圧迫している。

「出してっ、わたしの中につ、膣内射精してッ、欲しいの、おじさまのザーメンをたっぷり浴びせて欲しいのッ！」

それが無計画な妊娠へ繋がる行為だとは分かっていた。しかし、膣の奥へ粘っこく熱い性汁をぶちまけられたという欲望は抑えられない。大好きなおじさまの性器

第五話 おじさまを誘惑しちゃった日



おじさまにオンナにして頂きました

でほぐされた子宮の入り口が、鈴口から迸る子種汁で濡れさせられる光景をイメージしただけで意識が遠くなるほどの悦びを感じてしまう。

「んんッ、あぁっ、おじさまのオチンチン大きくなつて、もう限界につ、そうでしょおじさまっ、出して、わたしの中でイってくださいつ、んああああッッッッ!!」

「おっ、おおっ、春美出すぞ、春美いいい！」

密着していた亀頭が痙攣を起こし始めた時、広一は上下のピストン運動に切り替えた。若い娘を浮き上がらせるほど強く腰を使い、子宮口を何度もドスドス突き——、ビュクウウウウウ——！ ドビュッ、ドブッ、ドブウウウ！

「アアアアアアアア——!!!」

射精寸前で引き抜かれたペニスの先端から、張り詰めた乳房の下乳に向けて精液が噴出した。鋭くビクつきながら二度三度と放出する。

「熱いつ、むねに、おっぱいにおじさまの精液が……かかって……あ——！」

まるで殴りつけられているかのような衝撃が、マグマジミた灼熱感と共に襲ってくる。粘っこい白濁の的になる度に、九十一センチFカップの若い巨乳がパンチングマシーンのように奔放に弾む。精液のむせ返る青臭さに包まれながら。

強制される震動は、身体の芯まで響いてくる。乳房だけでなく乳輪と乳首の下側に着弾した時は、精液にねっとり全身を包まれている気分させる。どちらも心地よ

第五話 おじさまを誘惑しちゃった日

くて、背中が何度も弓なりに反れる。

「はあ……はあ……ああ……いい……」

春美は中年に抱き付きながら、満足感を凝縮させた溜息を吐く。荒い息を繰り返していたことで上下動していた肩が落ち着き始めた頃。

「おじさま……どうして外に出したんですか？ 中に欲しかったのに……」

甘えさせてくれる年上に阿るように、春美は正面からしなだれかかって訊ねた。胸へ射精されるのも快感だったが、おあずけを受けた膣内はまだ熱い。愛液塗れの肉はまだまだ欲しいとうねっている。子宮口へぶち撒けられたい欲求は萎えていない。

「夜は長いんだから。焦る事はないよ……ほら、触ってご覧」

呼吸を整えた広一は、そう言いながら春美の手を取ってペニスへ導く。射精したにもかかわらず猛々しさを失っていなかった。膣内射精を待望してヒクついている肉花卉と同じく、異性の性器を求めて力強く脈動している。春先の山に残る残雪めいた、精液と愛液のコーティングも、ペニスの絶倫ぶりを演出する花だった。

「まあ……素敵です、おじさま……わたしのおまんこに、今度こそたっぷり注いでくださいね……おじさまの残りの精液を、全部欲しいです……」

「うん……春美にゆっくり搾りとってもらうよ……」

「んなこと、させるわきやねーだろ」

おじさまにオンナにして頂きました

甘ったるい会話に、剣呑な声が重なった。

千風だった。いつの間にか仕事から帰ってきたのだ。

ずぶ濡れのスカートスーツ姿で、入り口で仁王立ちしている。目尻を吊り上げ、春美が見たことないほどの鬼気迫るオーラを放出している。

広一が目を剥いてガタガタ震え出した。

第六話 家内台風

「広一ッ、私のいないところで春美とやらないってルールは忘れてないよな!」

普段はちゃんづけなのに呼び捨てだった。口調も伝法色が濃い。ずぶ濡れでも、千風は不貞を働いたふたりを震え上がらせる迫力を醸し出している。

「すまんっ! 最近ご無沙汰だったから、ムラムラして襲っちゃまった……」

「四十過ぎて、約束の一つも守れないのか? 春美もだ。言っただろ、夫婦揃ってな
いところではさせないことになってるって」

「はい……………」

春美はすっかり気圧されて、消え入る声で返事をする。おじさまは嘘を言ってます、わたしが誘惑したんです! と言いたかったが、口が上手く動かない。

「二度とこんな馬鹿をする気が起きないように、ふたりともお仕置きだ。ついてこい!」
四十路とハタチの耳たぶを摘み、連行する。行き先は和室だった。三人を、鼻にツンとくるい草の匂いが出迎える。障子戸と襖と若竹色の壁で囲まれている落ち着いた
雰囲気の部屋だった。昼光色の蛍光灯を灯しても、竹林の中にいる気にさせる。

千風が戸棚を開け、皮の手錠を二つ取り出した。場違いな道具の登場に春美は目を

おじさまにオンナにして頂きました

丸くした。千風と楽しむ時に使っているからか、保管していることを知っていたらしく、広一は意外な顔はしなかったが観念したようにうな垂れてはいる。

「ふたりとも私の前で背中を向けて立て」

拘束されると予想はついたが、春美も広一も素直に従った。ここで逆らえば話は更にややこしくなるだろう。悪いのは自分であり、大好きな千風とはいつまでも仲良くしたいので、罰は受けると春美は腹を決めていた。

夜気を吸って氷のように冷たい拘束具で後ろ手に縛られる。手首にかけられた皮の輪は、食い込むほどにキツクはないが外せる位には緩くない。

「少し待ってろ」

千風は暖房を作動させて衣類を脱いだ。押入れの中から未開封の長タオルを取り出して身体と髪を拭く。

一度、背中から肩までを震わせてクシユン、と可愛らしい声でくしやみをして鼻をすすったが、ずぶ濡れになったせいで風邪を引きそうな様子はない。

(やっぱり綺麗……)

三十八歳の怒れるミストレスを見ながら、春美は場違いな感慨を感じていた。風呂場で見た時も見事だと思ったが、こうして普通の部屋で眺めるとまた違った趣を感じる美体だった。

ストイックな黒いリボンで馬の尾型に束ねられた、お尻まで届くロングストレートの髪はツヤツヤしていて枝毛など一本もない。キリリと緊張した切れ長の目と、強い輝きを放つ瞳は気の強さを体現している。スツと通った鼻梁に、牡丹色の厚い唇も魅力的だし、無駄な肉のない頬と顎が描くラインも凜呼とした彼女によく似合っている。肢体には、胸、腰、尻といった男が好む部位にのみ肉が程よくついていて、ウエストの括れ具合を際立たせるお腹にはぜい肉がついていない。乳房の下にうっすらと肋骨のアーチが形成されていて、その下は盆地のように窪んでいる。お臍も縦長で腹部のセクシーさを増大させていた。

スラリと長くしなやかな手足は流麗な軌跡を描き、足のサイズと足首の径も小さい。まったくもって年齢不相応なプロポーションだ。

「待たせたな。始めるぞ」

タオルを隅へ放り捨てると、力強い男口調で宣言した。

まずは広一だった。彼の目前でスツと目を細めた千風は、夫の頭頂を容赦なく掴んで足を払った。体勢が崩れて仰向けにひっくり返る広一。妻は夫が落下する速度に合わせて頭も押ししていたが、後頭部強打はさせない。だが、ドシン！ と部屋全体が震える派手な音を立てて広一は尻餅はついた。

「まったく、この節操なしのチンポが……あむっ……んんっ……ちゅむっ……」

おじさまにオンナにして頂きました

下半身に覆い被さった千風が、夫の萎えたペニスを啜え込んだ。根本まですっきり口内に迎え入れ、頬を蠢かせる。

窄めた頬の裏側でふにやふにやペニスを包み込み、そのまま粘膜で揉む。ぬめる肉膜から伝わる体温と、温かな唾液が竿と亀頭の表面全体に浴びせられる。

「んくっ…：苦いのと、薄い酸味…：じゅるる…：広一のザーメンと春美の愛液の味だな…：んむっ、んむっ…：お楽しみだった証拠だ…：じゅるっ…：」

鼻をふうふう言わせつつ、口で息継ぎも行う。その拍子に、口の端から唾液が筋を作って零れる。夫の精液と他の女の愛液が染み込んでいた股間に、妻の唾液が上塗りされる。

妻の前髪は揺れ、眉間に軽く縦皺が寄っている。悪罵を投げかけてはくるが、口内奉仕は至って丹念だった。むず痒さめいた甘い快感電流がペニスを何度も打ち、内蔵されている海綿体にどンドン血液が流入していく。

「さつき射精したのに…：んっ…：すぐに大きくなって…：ホント、絶倫だな…：」

ペニスの麓とほとんど密着していた唇が、少しずつ高度を上げていく。牡丹色の唇と男根の根本の間に見える肉竿は、春美が膣で受け止めた時と同等以上に硬く膨張しており、唾液でコーティングされてヌメ光っている。

高度七センチ程になると、しゃぶられているのは亀頭部のみになった。窄めた唇で、

鈴口からカリ首の区間を何度も往復する。千風は口先を蛸のそれみたいに伸ばしながら、口内粘膜で亀頭へ吸い付いている。髪も奔放に舞う。曇りガラスを擦る時に出る甲高い鳴き声みたいな水音が周囲を満たす。

亀頭だけでなく、勃起ペニスの芯までもがカアツと熱くなっていき、射精欲求も蓄積し始める。広一は、腹の底で精液が滾っているのを感じた。

ちゅぽんっ。

「ふふ、こんな稚拙なフェラでもうビクンビクンして……春美を襲った云々はさて置いて、溜まっていたのは本当らしいわね……でも」

玩弄した男を小馬鹿にしている目が、刃めいた鋭さを帯びた。

「これはお仕置きよ。焦らして焦らして、とことん苦しめてやるから」

唾液で濡れたペニスを軽く握り、根本からカリ首までの範囲をゆっくりと扱く。

広一はゴクリと喉を鳴らした。千風は妻であり、最も肌を合わせあった女である。

弱点や、耐え切れない責め方なども熟知しており、性技にも長けている。彼女が焦らすと言ったのなら、本当に射精させてもらえないのだ。

「いや、それは勘弁してくれ。ほんと、悪かったと思ってるから」

「だめ。こういうことは身体に教え込まないと。躰けを疎かにしては、つつがない生活など実現しないわ」

おじさまにオンナにして頂きました

哀願しても冷酷に返される。

立ち上がり、広一の腰の両側に足裏を置く千風。ペニスの亀頭冠を逆手に摘み、膝を曲げながら春美よりも遙かに脂ののった尻たぶをちよつとずつ落下させる。

くちゅ……。

唾液塗れの鈴口と、ほんの少しだけ愛液に濡れていた大陰唇の先端が密着する。小さく脈動する四十路間近の肉花卉は、二十歳の小娘よりもずっと肥厚していた。無毛のそこは一箇所の剃り残しも許さず、男で作り上げた熟れた性器の姿を喧伝している。

経験豊富な割には色素の沈殿はなく、手足や乳肌と遜色のない白が濃い肌色をしていた。表面も一枚剥いた玉ねぎみたいにツヤツヤしている。

「いくぞ………ん……っ………」

宣言し、腰を沈めていく。二枚の花びらの内側が亀頭の側面にくっついて、巻き込まれる。続いて赤黒い亀頭も黒ずんだ竿も、白い肉花卉の内側に呑み込まれていく。亀頭全部が厚みのある肉で全方位から圧迫されると、ペニスだけでなく腰までもが甘ったるい痺れに襲われた。

大陰唇は浮き輪みたいに丸く広がり、まるで唇がフランクフルトにかぶりついているかのよう。

おじさまにオンナにして頂きました

り往復する。長い間を置きながら、結合部で粘っこい水音が奏でられる。

膣肉は、厚い肉を後ろ盾にして絡み付きながら強く密着し、表面の端から端までを隈なく刺激している。ペニスの根本から先っぽまでがカツカツと熱くなり、広一は目の前で火花が散るほどの強烈な快感を与えられる。

勃起ペニスは暴れて、時には射精直前のようにピーンと伸び切る。もう一回擦られれば射精快楽が訪れるという時が何度かやってきた。だが。

「射精はさせないわ。ほら、こうすると出ないでしょ、出したいけど出ないでしょ？」すると、決まって千風は動きを止めた。亀頭冠と膣口を密着させて硬直する。ピストンはしないが、腹に力を込め、膣口で挟んだカリをクイッククイックと圧迫してくる。射精はできない。ただ、先走り汁だけを虚しく漏らすことしかさせてくれない。白濁液を吐き出すのに必要な快感刺激をおあずけし、その一歩手前の快楽を一定時間与えることで放出と寸断の狭間で苦しめる。そうして、ちよつとずつ快感の波を引かせていき、かなり収まった頃にまたペニス磨きを再開する。

「くツ……出させてくれ……俺が悪かった……本当に反省してる……あアッ！」息を荒らげ、目尻に涙さえ浮かべて屈服宣言を口走る。とても、四十過ぎの男の姿ではない。

それは、広一に夢中だった春美をも戦慄させた。自分を一方的に責め立ててきた年

第六話 家内台風



おじさまにオンナにして頂きました

上男性が、女に玩弄される童貞少年みたいにみつともないとは。

何か、大事な物が砕かれた気がした。この先も広一に抱かれることがあり、どんなに彼が余裕たっぷりで責め立ててきても、この光景が脳裏に浮かぶのではないか。もう、圧倒的な力を持った無敵の牡だとは思えないのではないだろうか。

「どうしてもイキたいなら、春美を舐め技だけでいかせることね。しゃぶるのはおまんこだけ。そうしたら、出させてあげてもいいわ」

切り付けるように千風がいうと、広一は娘ほどの年下女性をすぎるように見た。

「……分かりました。おじさま、どうぞ……」

それは春美へのお仕置きでもあるのだろう。そう判断し、千風との関係修復を望む彼女は中年の横へ移動する。

「待ちなさい。横でおまんこを突き出すのでなく跨るの。私がチンポに跨ってるみたいに、口の上にね……顔はこっちを向くのよ」

春美の身体がピタリと止まった。

(そんな……はしたな過ぎるわ……おじさまに失礼だし……)

恥ずかしさもあるが、自分を庇おうとした大好きな中年を侮辱するようなことをするのには、流石に抵抗を感じる。

「やりなさい。さあっ」

千風は冷徹に命令してくる。

「いいんだ春美ちゃん……っう……は、早く………」

だが、やらなければ千風とは元に戻れず、広一も焦らし責めを受け続けるしかない。春美は意を決して四十路男の顔を跨いだ。口にかぶりつかれるように女性器の位置を調整し、静かに腰を沈めていく。

「んああっ、やあっ、おじさま、そんなにガツガツしないでっ」

女性器が広一の唇に触れるか触れないかの位置までしやがみこんだ時、パン食い競争でパンに食いつくあんばいで、会陰から大陰唇のへそ側の合わせ目までを唇でガツプリ噛みつかれた。肉花卉を割って膣の中に舌が入ってくる。

舌は猛烈な勢いで膣内をヤスリがけしてくる。舌の表裏に分布する微細な瘤を使って膣ヒダを手当たり次第に引っ搔いて、性感を高めてくる。力を込めて丸めた舌先で強く長く擦ることも織り交ぜて、快感の緩急をつけてくる。

「ああっ、いいっ、すごいっ、舌なのに……オチンチンじゃないのに、こんな……」

「早くイキたいんでしょ？ クリトリスも苛めてやりなさい、ほらッ！」

焦らし刺激で恫喝された広一が、尖らせた唇の内部でクリトリスを包み込む。

「あはあっ、なに、これ……こんな初めてっ……あアアアッ……！」

胸肉をやわやわと揉むのと同じ調子で、クリトリスの肉弾力を楽しむようにリズム

おじさまにオンナにして頂きました

カルに圧迫してくる。乳悦ともピストン快感とも違う、強烈で鮮明な快楽が腰全体で爆発する。下半身が脱力し、胴底全部が広一の顔に落ちた。

春美の全体重を顔面で受け止めているというのに広一は頓着しない。射精したい一心で育てかけの膣を責め立てる。

「んツ……ふうン……こんな格好なのに……おじさまに失礼なのに……ああっ、感じちやう……！」

腰が猛烈に熱くなり、痺れ、感覚が危うい。心臓が早鐘を打ち、頭の中が真っ白になっっている。ひっきりなしに呼吸をしているのに、全然息が整わない。熟練の手管を受ける若い娘は、急速に頂上に近づいていた。

「可愛いわ春美。思い切りイキなさい……私に焦らされて……我を忘れて、射精したさだけであなただを叩き上げる無様な短小おっさんにイカされるの」

夫の腹に添えていた手で春美の頬を撫でる千風。顎の尖りを摘みながら、艶かしい瞳で裏切り者の絶頂顔を見届けようとしている。

「ふああっ、ああっ、イクっ、あああ、イっちゃう……！」

自分が射精するためだけに快楽を与えられるという惨めな状況であったが、広一の手管はそんなストレスをもものともせず春美を追い詰める。

身体が赤熱し、芯から熱くて堪らない。腰から下がどろどろに溶けてしまったので

第六話 家内台風

はないかと思うほど感覚がなかった。そして、目の前が真っ白になって、続けて極彩色の虹がパツと広がって——。

「あッ、クリトリスが……おまん、こが、あアッ、イクウウウウウウウウウ……!!」
後ろ手に縛られたまま、春美は背筋を仰け反らせて固まった。千風の指を振り払って顎が上がり、ソバージュのセミロングがでたらめに躍る。足指から手指の先までが小刻みに痙攣した。

舐められていた股間からは愛液がトプツとしぶき、広一の顔面を汚す。太腿に起こる細かい振動が、彼の頬に伝わって絶頂したと告げている。

「おおおううううツツツ!!」

広一が叫んだ。ノルマを達成させたご褒美を受け取ったのだった。春美の性器を口で受け止めた状態で全身をビクンビクン震えさせる。

吐き出される精液は、全て千風が膣で受け止めている。夥しい量の粘っこい濁液を浴び、春美ならばあられもなく身体を跳ねさせるだろうに、彼女と違って余裕タップリの微笑を浮かべながらお仕置きしたふたりを睥睨している。

（いいなあ……わたしも、膣にザーメン受けたいのに……）

千風の結合部から染み出している精液を見ながら、春美は絶頂失神した。

第七話 おじさまに初めてを

翌日。台風は過ぎ去っていた。窓の外では、群青色の世界に太陽の光線が差し込む中、気の早い虫や鳥たちが台風一過の喜びを自由気ままに歌っている。

春美は誰よりも早く起きた。クリーム色のトレーナーとジーパンに、首掛けタイプの紺色エプロンをして、朝食の支度に勤しんでいる。今朝は食事当番ではなかったが、昨日の失敗のことがあり、加えて千風に頼みごとがしたかったので、相応の態度をとろうとしたのだった。

「おわりっ、と」

料理が完成した。こんがり焼けたシヤケ、ほうれん草のおひたし、大根とネギとかめの味噌汁、そしてほかほかご飯。冷蔵庫から納豆、ふりかけ、海苔に醤油も出す。焼きシヤケの香ばしい匂いや、鍋から漏れ上る湯気がダイニングを包み込む。

テーブルに皿を並べ始めた時、千風が入ってきた。Yシャツを引っ掛けただけのラフな格好だった。ノーブラらしく乳首の尖りが浮かび上がっていたが、ショーツは穿いている。白い裾と肌色の太腿に囲まれて、黒いレースの前布が歩く度にチラついて

第七話 おじさまに初めてを

「おはよう。今朝は私の番だったのに、やっててくれたのね。ありがとう。でも、どういう風の吹きまわし？」

昨夜見せ付けていた威圧感は微塵もなく、いつもの気さくな調子だった。

「おはようございます……その、昨日は本当にすみませんでした！」

思い切り頭を下げた。ソバージュのセミロングがふわりと浮かび、沈む。

「いいのよ。ケジメはつけたから、いつまでも気にしないで」

律儀なコねえ、と顔に出しながら千風は微笑んだ。

「ありがとうございます。えと、その……ついでということでもないんですが」

許してもらえたことに感謝しつつ、もう二度と同じことはすまいと誓うと、頼みごとを切り出した。

「わたしに、男の人へのご奉仕の仕方を教えてもらえないでしょうか？」

男性へ奉仕する方法を教えてもらいたいなど普通の女がいうことではないと羞恥心に身体が熱くなったが、神妙な顔は崩れず無意識にでも千風の目から目を逸らすこともなかった。

「いいわよ」

「え……本当ですか!？」

親切な彼女のこと、引き受けてくれるだろうとは思っていたが即答されると戸惑っ

てしまう。

「勿論。マグロちゃんが、そういうことを覚えたいと言ってきたのは嬉しいわ」

「マグロって……」

「あははは。とにかく、私はおっけえだから。講義は夜にしましょう。最初の教材はあのバイブね。上手くなったら、うちのヤドロクを使わせてあげるわあ」

広一にさせると聞いた瞬間、ドクンと心臓が跳ねた。顔が耳まで真っ赤になる。

奉仕に興味を持ったのは、昨夜の千風のお仕置きが原因だった。口だけで勃起させられた時の広一の快感に歯を食いしばる表情が印象的で、自分もあんな顔をさせたいと思ったのだ。自分を気持ちよくしてくれる広一には、自分も積極的に気持ちよくしてやりたい。

千風の目を盗んで誘惑することは自重するが、春美は広一とのセックスチャンスはこれからも楽しむつもりでいる。

口角を上げ、真っ白い歯を覗かせながら笑うのを見るに、千風はその心情を看破しているのだろう。裸もセックスも見せた相手でも、ふしだらな願望を見破られるのはやはり恥ずかしい。

「それはそういうことにして、朝ご飯をいただいでいいかしら。春美ちゃんは、あいつを起こしてきてくれる？」

第七話 おじさまに初めてを

春美は頷いた。ふたたびちゃん付けで呼ばれることの嬉しさを噛み締めながら、飾り気のないエプロンを翻しつつ、大好きなおじさまの寝室に向かった。

二〇××年十二月〇日。夜。春美は千風と共に、身に付けた技能を中年男にぶつけた。

「んっ、ちゅっ、べろ。べろ……んっ、ふはあ……おじさまのオチンチン美味しいです」「はむはむ……れろろろっ、ぷちゅっ、ぷちゅっ……ふふ、おちんぽ凄くビクビクさせて……そんなに私と春美ちゃんのフェラが気持ちいいの？」

狼塚家の夫婦の寝室に、粘着質な水音と熱っぽいあえぎ声の輪唱が木霊する。ベッドの側面に腰掛けた広一を、春美と千風がふたりがかりで責め立てていた。

三人とも裸だった。無毛の男性器をタイプの異なる美しい女ふたりがフェラチオしている。

二十歳の春美は竿を担当していた。相変わらず、外見は年季が入っているがサイズは小さい逸物の根本から亀頭の先までを、顔を横向きにして舌を突き出し、舐め歩く。時には唇で優しくはんでやわやわと刺激する。

若々しい三十八歳の千風が陰囊を受け持っていた。根本まで口内粘膜で含み込み、うずらの卵よりも一回り大きな肉玉をその無毛の袋ごと舌で転がす。

おじさまにオンナにして頂きました

ふたりの丹念な奉仕は、中年男の太腿を何度もビクつかせ、腰の上下動を強要し、既に限界まで起立していたペニスをピーンと何度もそり立たせた。

「ああ、先走り汁がぷくって出て、あ、あ、垂れちゃう……千風さん、舐めていいですか？ もったいないですから……」

「んふうっ……いいわよ……ん……ああ、もう二十分も焦らしてたの……ついでの、この辺で一度イカせてやりましょうか。春美ちゃん、精液全部譲るわね」

室内の壁掛け時計で時間を確認した千風が告げると、春美の顔がぱあつと輝いた。

「はいっ。おじさま、思い切り射精してくださいね。わたしのお口に、おしっこをするみたいなたっぷり流し込んでください」

ニツコリ微笑むと、まずは舌を突き出す。鈴口の上で決壊寸前だったカウパー汁の汁塊を掬った。口に含んで舌の上で何度か味を転がした後、尖らせた唇で先端にキスをする。

先走り汁の味は、濃いにがしよっぱさだった。我慢に我慢を重ねたことで濃縮された牡汁の旨みは、胃に落ちると胃粘膜をカアツと熱くした。

お腹の中に広がる熱さを心地よく思いながら、尖り唇を肉伝いにカリ首までスライドさせ、唇の内側と口内粘膜で亀頭を丸ごと包み込む。赤黒くてツルツルした肉表面の全方位を、ヌルヌル感たっぷりの柔らかくて温かくて厚い肉壁とくっつけさせられ、

第七話 おじさまに初めてを

ペニスが根本から大きく振幅した。

「じゅぶぶぶつ、じゅるっ、ぬっぷつ、ぬっぷつ……ぬろろろろ、ふはあ、はふはふ……ちゆる、んくんくっ……はあ……先走りのお汁がどんどん溢れて……」

唾液をたっぷり浴びせた上で、挟み込む唇と窄めた頬の裏側でプリプリした触感の亀頭を研磨する。頭を上下に振る度に、枝毛が一本もないソバージュのセミロングが暴れ馬みたいに宙空を跳ね回る。亀頭が気持ちよさそうにビクつくくと、頭頂を握っている広一の手が強張って髪をくしゃっと握り締めた。

中年男が快感にあえいでいることを感じ、春美の胸は熱くなる。もっと気持ちよくなって欲しい、もっと気持ちよくしたいという純真な奉仕心とも牝としての誇らしさともつかない感情が湧き起こり、陶酔を覚えた。

春美は亀頭だけでなく、根本までを飲み込む。先端に行っていたことを今度は根本から鈴口までの区間で行う。往復していると、唇の内側に引っ掛かるため浮き出る血管のでこぼこや、カリの張り具合がよく分かる。

単純な口ピストンだけではまんねりになるので、亀頭冠の裏側の皮の繋ぎ目へ尖らせた唇でキスの雨を降らせ、舌のざらつきでねっとりヤスリがけすることも織り交ぜる。

亀頭の麓から亀頭までが何度もビーン、ビーンと強張った。透明な先走り汁に白色

おじさまにオンナにして頂きました

の比率が多くなり出す。牝の淫心を誘うかのように、赤黒い亀頭からくゆる湯気に、ナマ酸っぱい牡臭が混ざり始めた。

(はあああ……この匂い……クラクラする……)

皮の繋ぎ目を舐めていた春美の鼻腔に牡臭がぷくんと入ってくる。男の発情の証左であり、絶頂をねだる証でもある匂いを嗅いでいるだけで日向ぼっこしている時みたいに身体が火照り、股間の奥がきゅーんと疼いた。空洞の口内が物足りなさを感じ、ザーメンを浴びせられたくて堪らなくなる。

「おじさま、本当に限界なんですね？ わたしの口で射精させて欲しいんですね？」
二十歳の小娘の上目遣いに、四十過ぎの中年男はコクコク頷いた。せわしなく息を継ぎながら、もう出したくて堪らないと訴えてくる。ペニスがダイナミックに振幅するさまも、もう限界だと叫んでいる風に見えた。

春美はまたニッコリ微笑んだ。

「それでは、思い切り出してくださいね。もう、本当に精液を吐き出す便器とか、そんなものだと思ってこの口の中でスッキリしてください」

ねちねちと陰囊をねぶっていた千風とアイコンタクトをとる。彼女も頷き、肉玉袋への圧迫を強めた。痛みと快楽の境界線を知る百戦錬磨の美女は、春美への援護射撃に徹した。

射精させることと精液を独占できる権利を譲られた若い娘は、自分の唾液を散々染みこませた肉棒の根本から先っぽまでを再度粘膜で磨き上げる。

今度の勢いは猛烈で、射精間近の男が女性器にがむしやらにピストンするのを髣髴とさせた。唾液の粒子が広一の股の間に飛散し、間断なく粘着水音が部屋に響き渡る。

「ぶふう〜、ぶちゅんッ、ぶぱっ、ぶぷっ、じゅるるる〜〜〜！」

往復しながら春美はペニスを吸引する。柔らかいほつぺたを思い切り窄め、濡れたガラスを指で擦る時に出るような、甲高くて下品な音が連続する。

千風が引き受けている陰囊がキューツとしぼみ出した。どんどん肉玉の感触がなくなっていく。亀頭も大きく膨らんで、雄々しいというより破裂寸前の風船を思わせる。

「だひて、だひておひはまつ！ ぶっちゅ、ぶふう〜、はるひは、おひさまのへいえきへんじよですっ、たくさんのまへてえ！」

二十歳の若々しい娘が四十過ぎの男に向ける上目遣いは、牡に媚びる牝のそれだ。髪が被さって見え隠れを繰り返すうなじから、牝の発情臭が立ち上る。膨らみきった亀頭の上側が、口蓋と衝突した刹那。

ドビュンッ！ ドブドブドブドブウウウ！ ビュ〜、ビュビュッ！

「んむううううう！！」

噴水じみた勢いでドツと精液が押し寄せる。雨上がりの叢など生易しいレベルの生

おじさまにオンナにして頂きました

臭さが口内に充満して鼻孔へと突き抜けていく。精液の粘りも強く、小麦粉のダマを何倍も凝縮させたようなドロドロ感。しかも体温をたっぷり吸収して酷く熱い。

「んぐっ、ごくっ……んぐんぐんぐっ、ス〜〜ン！ ス〜〜ン！ んくんぐっ」
そんな飲み難い体液を、美味しそうな顔で飲み干す春美。下品に鼻穴を大きくし、呼吸の鼻息を荒らげながら。

喉にしつこく絡み付きながら胃の中へ落ちていく感触も、胃粘膜にへばりついて熱さを擦り付けてくる心地も、二十歳の娘にとっては快感だった。

触れてもいないのに股間がジュンと潤って、肉棒で埋められたい気持ちに駆られる。重く粘っこい音を立てながら頭を上下に振って残り汁を出しつつ、奉仕するペニスで膣内をヤスリがけされる様子と、現在口で受け止めている射精を降りた子宮口へ向けて再現されるシーンを頭の中に思い浮かべては興奮していた。

「んむっ………んっ………」

射精が終わり、尿道に残っていた分も吸い上げると口を離す。吐き出されたペニスは唾液と精液でヌメ光っていた。幾らかビクついてはいるが、まだ萎える気配はない。

そんなペニスを名残惜しそうに見詰めた後、やはり陰囊を外にもどした千風の目を見ながら閉じている自分の唇を指さした。口内にはまだ精液を残している。

「なに、私にくれるの？」

第七話 おじさまに初めてを

春美はコクリと頷く。千風は三十分にも及ぶ口淫奉仕で上気した頬を吊り上げて、簡潔に礼を言うのと彼女とキスした。

肉厚の唇が重なると、残しておいたザーメンを春美は口移しで渡した。ふたりの美女は恋人同士みたい舌を絡め合い、精液を譲り唾液を受け取る。口の周りが透明汁と白汁でべちよべちよになると、それも舐め合う。

お互いがお互いの肩を抱き、乳首をつつき合わせ、豊満な乳房を接地し合いながら、相手の顔に発情した者特有の熱っぽい吐息を吐きかける。

「はふう………美味しかったです。おじさま、ありがとうございます」

「それじゃ、お礼に穴を使わせてあげなきゃね。あなたが育てた春美ちゃんの牝孔をゆつくり味わうといいわ」

ベッドに腰掛ける広一の背後に移動して春美は四つん這いになった。犬の伏せと同じく、頭を低くして脛をシーツにつけたまま太腿を持ち上げて尻を掲げる。

肉花卉どころか股間一帯が飴色に輝いている。妄想しながらの長時間の口奉仕は、牡棒を迎え入れる準備も整わせていた。

牡の蹂躪を心待ちにしている肉穴は、緩慢な開閉を繰り返す。奥にある薔薇色粘膜をチラチラ見せ、尻を上げている現在も肉土手の縦隙間から愛液の筋が零れていて、小雨の時の雨だれみたいに断続的にシーツに落ちて染みを作っている。

第七話 おじさまに初めてを

中年ペニスが進入してくる感触が堪らない。自分の中に割り込んできていると思うと、背筋がゾクゾクする。人並み以下のサイズのペニスも、胸を一杯にする多幸感を与えてくれる。二十歳の娘の膣は、この肉棒に鍛えられ、飼いならされた。セックス講義が始まった当初の硬さはなく、熟女顔負けのねっとり密着感を体得していると同時に、春美も大いに喜べる体質になっている。

ふちゅうンッ！

ふたりの股間がぶつかり、愛液の飛沫が周囲に飛んだ。亀頭の先は子宮口に届いていないが、脳まで揺さぶられたような衝撃が襲ってきて、春美の頭は心地よく白む。

「ああっ、いいっ、おじさまっ、突いてえ、わたしの膣をもっと鍛えてえ〜」

広一はベッドと胸板の間でひしゃげていた九十一センチの巨乳を鷲掴みにしながら腰を振る。速く遅く、力強く弱く、浅い部分を奥まったところを勃起牡棒でランダムに擦り上げる。

張りに富んだ瑞々しい巨乳を揉みしだきながらの抜き差しは相当な快樂らしく、鼻息は大風だった。広一は欲情の炎が燃え上がった瞳で、ソバージュのセミロングが揺れる若い娘の背中を熱視している。

ペニスがますます硬くなり、張り詰めていた。そんな肉棒に擦られれば、膣内を迸る快感も上昇し、捏ね回されるために子宮口が少しずつ降りてくる。

おじさまにオンナにして頂きました

「あふうっ、子宮口がぐりぐりつてえ、んああはあああつつつ！」

広一は、亀頭の先端を子宮口に密着させて尻でのの字を書き始めた。

プリプリの肉先で抉りこまれるのに弱い春美は、普段の物静かな振る舞いとは正反対のはしたなさを披露する。尻から腰のくびれ、肩甲骨、後頭部を激しく蛇行させ、ケダモノの叫びじみた腹の底からの嬌声を搾り出す。鈴の音を転がしたような美声の持ち主であるだけに、下品なあえぎ声も男はずっと聞いていたい官能の音色であった。と、唐突に膣内に空虚感が訪れた。

「え……おじさ——アアアアアアン！」

尻孔に灼熱感。広一は、膣から抜いた肉棒をアヌスに挿入したのだ。

入り口を囲んでいる縦皺が、入り口の肉と一緒に外側に伸びた。バイブとローションで鍛えたセピア色の入り口は、膣に勝るとも劣らない適応性を獲得しており、突然且つ一息の挿入にも十分に耐えられた。

肉が詰まった尻たぶの肉密度を後ろ盾に、肉道は待望のおじさまペニスを締め付ける。愛液をたっぷり纏ったペニスはつかえることなく届く限りの深奥へ辿り着く。

「あああ………おじさまにお尻バージンをもらってもらった……はああああ……おじさまありがとうございました……んっ……でも、動いて、止まったままだと堪らないのお」

男の逸物を啜え込んだまま、春美は左右に尻を振る。振り返って広一を見上げる目は欲情に蕩けた牝のそれだった。

出し入れが開始される。広一は尻たぶの頂上を手跡がつくほど握り締め、何度も下腹をぶつける。乳房並みに柔らかい尻肉が、広一の手元から外側に向かって波打った。粘っこい抜き差し音よりも、パンパンという肉同士をぶつけ合う甲高い衝突音の方が高い。アナルセックスをしている音が、部屋の全員の鼓膜を叩く。

性器に仕立て上げた排泄器官を責められる肉悦に、春美は髪を振り乱して悶える。尻道内が満たされる充実感と空虚にされる飢餓感を交互に味わわされるのも、窮屈な内部を無理矢理擦り上げられるのも目が眩むほど気持ちいい。

尻の中だけでなく腰全体が熱くなり、放って置かれる膣内が嫉妬の疼きを訴えてくる。つい今しがたまで牡棒をはんでいた肉花卉は、その肉棒の径の形に広がって、愛液をだらだら漏らしている。

「んあああつ、イキそうつ、お尻でイクうつ、おじさま、一緒に、一緒にいいい！」
身体の芯まで揺さぶられる快樂に押し上げられる春美は、一人前の快樂スポットに育てられた膣を責められていた余波を追い風に、アヌス絶頂をキメようとしていた。開きっぱなしの口の端からはしたない唾液の滴が流れ、目はすっかりトロンとしている。全身が官能色に染まり、絶頂目前にして身体が求めている膨大な酸素を常時吸

おじさまにオンナにして頂きました

い込む表れで、腹の激しい上下動が止まらない。

横では、尻穴での初絶頂を迎えようとしている春美を、艶かしくも温かな目で千風が見ていた。セックスを嫌っていた頃とは正反対の痴態を見せる彼女の変化を瞬きもせずに凝視している。

責め立てている広一も、切迫した呼吸を繰り返していた。膣内射精しかけていた中年ペニスも膨張しきり、先走り汁をだらだら撒き散らしながら射精の時を迎えようとしている。

「んっ、ンンッ、あああっ、はあああああ……いつくくイクううウウウ!!」ズンッと強烈にペニスが突き入れられた瞬間、春美の顎が上がると共に背中が沈み、後頭部から臀裂の始まりまでのラインがすべり台じみた斜面を描いた。

最大限まで背を反らした春美は、その体勢でほとんど硬直し、数秒に渡って微痙攣した。フルフル震える肉花卉が白みの混じった愛液をトロツと垂らし、シートに円状の染みを作っている。

ドクンッ、ドビュドビュッくく、ビュルルルッ!

尻穴内部で熱く粘り精液が噴出した。奥に向けて間欠泉みたいな猛射を見舞い、何度も何度も擦って自分の感触を染み付かせた肉洞内部を、とどめとばかりに染め上げる。春美の脳に、初のアナルセックスの相手であり絶頂させてくれた中年肉棒の旨み

が刻まれる。

「あつついゝゝはあああああ、おじさまのせーえきい、ンンツツ！」

一度達したというのに、濃厚な牡汁で尻道内部を染め上げられる甘美さに春美の背中がまた大きく震えた。

亀頭の先で子宮口を捏ねくり回される快樂にも、膣内射精される快感にも並ぶ尻内射精の愉悦だが、本来ならば性感帯にはなりえない場所を快美を得るための器官に變貌させたという事実が、そこを性器と同じ風に使われているという背徳感を助長させ、身体の芯を大いに痺れさせる。

ぬぷんっ…ぶじゅウウツツツ！

体力を使い果たして崩れかけた春美に、尻から抜いたペニスを膣内に一気に挿入した広一。突き入れた刺激で薄い精液が逆る。下がっていた子宮口に、汗が当たる圧力と肉棒の重い一撃が見舞われた。

「あひいゝゝゝゝ!!!」

犬が遠吠えするみたいな体勢で身体を突っ張らせ、あの字に開いた唇の間から舌が突き出て細かく震える。

目の前と頭の中で同時に幾つもの火花が生まれては散り、身体だけでなく心臓までもが強張るような危うくも魅惑的な快感が全身を打つ。

おじさまにオンナにして頂きました

膣内射精されたくて、夫婦の前で避妊薬を服用し続けて備えていたが、それで完璧に避妊できるわけでもない。もしかしたら、おじさまの子供を妊娠するかも。そんな考えが頭の中に忍び込み、女の三穴を全て精液で埋められた被虐的な快感と結託し、快楽を大きくする。

「出て……るう……お、おじさまのせーえき……わたしのなかに……はああああ……はああ……はああ……」

艶かしい抑揚のついた嬌声の余韻も収まった時、今度こそ春美は顔れて失神した。落下した衝撃でベッドが軋み、小さな上昇気流が起こり空気がかき混ぜられる。

尻穴と大陰唇の割れ目から、白めの愛液混じりの中年精液を垂れ流しながら眠る汗まみれの春美は、満ち足りた微笑をたたえていた。

第八話 望まなかったスワッピング

二〇×☆年三月〇△日。晴れ渡った空の下、春美と広一が手を握り合って歩いていく。県庁所在地の駅近くにある映画街は、休日ということもあり人でごったがえしている。

「今日は付き合ってくださいありがとうございます」

志望大学への入学を果たした春美は、お祝いをしようと言った狼塚夫妻に広一との映画鑑賞を願った。妻の千風はそんなことでいいのと二つ返事で快諾し、広一もすぐに頷いた。

広一は、グレイのジャケット、白の長袖シャツ、若葉色のスラックスというありふれた服装の冴えない中年だった。一方の春美は、魅力的な若い娘であったので年の差カップルはよく目立った。

春美のクリクリとした精気溢れる目。丸っこくもだぶつきのない頬と尖り気味の顎が見事な顔の輪郭を描く。ソバージュの髪はよく手入れされていて跳ね毛の一本もない。身に付けるクリーム色の厚いコートは新品同様で、長い裾から伸びる茶色の長革靴もピカピカだった。狼塚家に来た時とは対極の垢抜けた様子で、春美の素地のよさ

おじさまにオンナにして頂きましたが十分に発揮されている。

「いやいや。春美ちゃんとデートができて凄く楽しかったから、札を言うのはこちらの方さ。それはそうと、お昼はまだだったから、その辺で軽く食べてから帰ろうか」春美は頷き、ふたりは目に入った喫茶店に入った。

正午を二時間も過ぎたからか客はまばらだったので、好みの窓際に陣取れた。軽食を注文する。店内には絵画や背の高い観葉植物が配置され、耳に届くか届かないかの小音量でバツヘルベルのカノンが流れている。落ち着いた雰囲気の店だった。

空調が十分だったので、春美は厚いコートを脱いだ。五月上旬並みの陽気になるという天気予想を信じて下はノースリーブだった。

なめらかで白に近い肌色の腕が露になり、広い襟ぐりが鎖骨からうなじまでを見せている。薄布と胸元についた大きなリボンの端を、弾力の強い豊胸が内側からを押し上げていた。正中線に沿って入っているスリットが、乳房同士がおしくら饅頭をしてできている谷間をチラりと見せる。

正面にいた広一が鼻の下を伸ばす。

「なんです？」

「いや、可愛いなってさ」

褒められた娘の顔がみるみる真っ赤になる。

第八話 望まなかったスワッピング



おじさまにオンナにして頂きました

「そんな……恥ずかしいです……あの素敵な千風さんの旦那さんに言われると……」
「あははは……あいつも美人だけど春美ちゃんみたいな初々しきや愛嬌はないからなあ……出会った時からあんな感じだったし」

「そうなんですか？ 初めて聞きました」

「そうなんだよ。若い頃のまま年だけくってるみたい。あの外見の変わらなさは異常だよな……性格の不変っぷりもだけど」

中年がケタケタ笑う。親しい者を屈託なく褒めるのに似た雰囲気を滲ませている。
「そう言えば、夜の生活が盛んなことが若さを保つ秘訣だとか、千風さんから聞いたことがあります」

「あー、あいつらしいコメントだな。実際そうかも知れない。春美ちゃんもそれで綺麗になったんだし」

会話中に引いていた羞恥熱がぶり返し、また熟したトマトみたいな顔になる春美。
そこに注文の品が運ばれてきた。ふたりは他愛ない話をしながら遅い昼食をとる。

「お、春美じゃん」

無遠慮な若い声が割り込んできた。声の主を見た春美が目を剥いて硬直する。彼女を見る広一の目がスツと細まった。

背の高いハンサムで二十歳前後に見える。春美と同じ歳なのかも知れない。人一倍

第八話 望まなかったスワッピング

自信に満ちた顔をしており、立ち振る舞いも堂々としている。

彼は一人の女の子を侍らせていた。背中まで届く艶やかな髪をストレートにして、若い子で、○校生位に見える。小柄だがグラマーで、幼げで整った顔も彼と同じように自信を滲ませている。春美を見る目がどこか挑戦的なことを考えれば、彼女の自信の源泉は女としての優越感なのかも知れない。

「なんだよ、久しぶりに会ったのに愛想がないなあ。そっちのおじさんは誰？ 親父とか？」

暗い顔をしていた春美が、重々しく唇を動かす。

「違うわ。わたしのお父さんのお友達で、わたしもお世話になっているの」

「ふーん。かなり親しそうに見えるけど、ひよつとしてパパとか？」

「お父さんじゃないって言ったじゃない」

青年の言葉の意味が分からなかったらしい春美が、うんざり声で繰り返す。これほど無愛想で嫌悪感を露にしている彼女は珍しかった。

「まあいいや。それより、綺麗になったなくお前。暇あるか？ どうだ、これからホテルに行かないか？」

腕を組んでいた少女が面白くなさそうな顔をしたが、彼は春美を口説くのに夢中で気付いていない。

おじさまにオンナにして頂きました

「なに言ってるのよ……あなたとはもう別れたじゃない……嫌よ」

「疎遠になったってだけで、別れ話をしたわけでもないだろ。いいじゃん、俺の身体の味は忘れてないだろ？」

自信に満ちた青年は、悪びれもなく言う。

「わたしの考えは変わらないわ。さっさとどこかへ行つて」

「なんだよ、そっけないなあ……そうだ、おじさんはどう？ スワツピングやんないか？ こいつ貸すからさ。十代なんだぜ。しかもテクニシャン。着やせするタイプで、脱ぐと見た目よりもずっとグラマーだし。だから春美を説得してよ、な？」

馴れ馴れしい青年とは対称的に、春美はすっかり呆れ、少女は顔をしかめている。前者は『おじさまがそんなことを認めるはずがない』と、後者は『こんなオジンとなんて御免だわ』とそれぞれ顔に描かれていた。

「いいねそれ。けど、本当にそんな若くて可愛い子が俺なんかの相手してくれるの？」
思いもよらない広一の態度に、春美はギョツとした。

「うはあ、話が分かるねえ。勿論、言うことは聞かせるから安心してよ。そっちこそ、春美を説得してくれよな」

「ああ……春美ちゃん、悪いけど頼むよ、ね？」

だらしなく鼻の下を伸ばしながら広一。予想外の展開に呆然とした春美だったが、

第八話 望まなかったスワッピング

押し倒す彼が狼塚広一には違いないので、渋々首を縦に振った。大好きな中年男性に裏切られたという意識が、暗闇の中で全身がズブズブ沈んでいくような気にさせた。

適当なラブホテルで休憩することにした四人は、元カレの案内でベッドがふたつある部屋を選んで入室した。

「ふっ……くふふふふっ……」

裸になりカップル同士が向かい合うと、向こうの彼女が必死に笑いを堪え始めた。笑いの種は広一の逸物だった。皮が剥けて赤黒い亀頭が露出し、竿の黒ずみも年季が入っているもののサイズは思春期少年の持ち物ほどなのだ。

一方、彼女のパートナーであり春美の元カレでもある青年のペニスはずっと長く太い。どちらが立派かと訊ねられたら、男の味を知る女であるほど彼だと答えるだろう。四十過ぎの男が、自分の半分位の歳の青年に完敗しているのだ。笑いもこみ上げてくるだろう。

「おいおい、年上の人に失礼だろう？」

たしなめる彼も、勝ち誇った顔をしている。礼節の衣を被りながら完全に見下していた。

（っ……ふたりしておじさまを馬鹿にして……!）

おじさまにオンナにして頂きました

短小ペニスの実力を知らないで、大好きな広一を馬鹿にするふたりに怒りを覚える春美。

だが、当の広一はまるで気にしていない風だ。十代の娘の肢体を頭のとっぺんから爪先までしげしげと見詰めている。その股間が、徐々に膨らみ始めていた。

「んじゃあ、分かれようぜ。おじさんはこっちでコイツとしててよ。オレはそっちで春美と楽しむからさ」

年下に仕切られていても広一は素直に頷き、室内で一番若い娘がいる方へと歩いていく。

「へへ、ほんといい身体してるな春美。前もよかったけど、今はもつといい」

元カレが遠慮なしに触れてくる。女好きするハンサムな顔が下品に歪み、ボディビルダーみたいな筋肉質の身体の股間に生えたペニス徐徐に膨らみ始めていた。

「おおっ、すげえもちもちしてる。手に吸い付いてくるな」

利き手の親指と人指し指で片方の乳房の下乳を揉みながら感嘆の溜息をつく。所作には淀みがなく、かなり女遊びをしていることが窺える。後で噂話で知ったことだが、春美と付き合っていた当時も、何人もの女をとつかえひつかえしていたらしい。

「でけえのにこんな肌で……うへえ、弾力も強いな」

片乳の味に喜ぶと、今度は正対して両方の乳房を揉む。十指を広げて握っても掴み

第八話 望まなかったスワッピング

切れない巨乳を、下から上へ上から下へと、水が対流する軌跡で捏ねる。

(んっ……こんなやつのお撫でも感じちゃうなんて………おじさまたちに開発されたからなあ)

円を描かされる乳房の根本と、握られている乳肌の内部に仄かに甘い痺れが生まれている。だが、春美は快感に身を任せるつもりはなかった。好きでもない男に、心まで開きたくはない。

ふと、広一たちのベッドを見ると、仰向けに寝そべった彼女が中年に正面から覆い被さられていた。自分と同じように大きな乳房を揉まれている。広一のぼさぼさ頭に隠れて彼女の表情は見えない。

「どうだ、気持ちいいだろ？」

「別に……あれから二年近く経つけど、テクは上達してないんじゃない？」

「言うじゃん。ひよつとして、あのおじさんに義理立てして耐えてるのか？」

「さあ、どうかしらね……んっ……」

あの中年の前で乱れさせてやると言わんばかりの顔で、彼は片手を秘所へ移動させた。握り拳から人指し指を立て、花卉の間に根本まで挿入する。

湿った音が小さく響き、閉ざされた膣内がゴツゴツした指一本の形に変わっていく。

「おほっ、すげえ吸い付き……なにこれ、この前引っ掛けた三十路のヤリマン女も目

おじさまにオンナにして頂きました

じゃないぞ……可愛い顔してる癖に、ひよつとしてあのおじんとヤリまくりとか？」
ふいっとそっぽを向く春美。下品過ぎる質問には返事をする気になれない。

とは言え、広一と千風に鍛えられた女肉壺は嫌いな男の指愛撫でも快感を感じてしまっている。膣内をそよ指が、すっかり谷間を深くした肉ヒダを引っかく度に、ピリツとした快感電流が走る。膣の奥がムズムズして、肩幅に開いていた太腿が時々小さく痙攣した。

「なんだかんだ言っつて、やっぱり感じてるみたいだな。締め付けてくるまんこの肉が、気持ちよさそうにヒクついてるぜ。ほら、スケベ汁がオレの指の股から手首にかけて垂れて、太腿にも垂れてるぞ」

「あつそ」

胸と膣への同時攻撃で確かに快感を感じるが、我を忘れるほどではない。春美は先刻と同じく冷たくあしらう。

「やせ我慢しやがって。その澄ました顔をくしゃくしゃにしてやるぜ」

元カレは仰向けに寝るよう指示し、春美は大人しく従った。寝そべっても流れない豊胸に口笛を鳴らすと、青年はもどかしそうにペニスにスキンを装着させる。利き手でペニスを真ん中から握ると、女性器の直前に亀頭を持ってくる。

(むう……やっぱりおじさまよりも大きいわ……)

第八話 望まなかったスワッピング

ガチガチに勃起した逸物は、全長二十センチはありそうだった。膨らんだ亀頭は野生の苺を逆さにしたみたいで大ききで、亀頭冠は椎茸の傘並みに広がっている。中央線から黒みが広がる竿には、ドス青い血管がでたらめに分布していた。径も太く、五センチ以上はあるかも知れない。

サイズといい外見といい、男を知る女であれば垂涎ものの逸品だろう。春美も、不覚にも胸のトキメキを覚えた。活発に熱い愛液を吐き出しながら膣内が疼きだし、早くこの牡棒にピストンされたいと言っているようだった。

「昔は、処女だったからコイツで楽しめなかったんだろうけど、今はかなり経験を積んでるみたいだからいい思いできると思うぜ」

自信たっぷりと言ってくる。その表情には、過去のことへの反省は見えない。

(やっぱり自分勝手なんだから……)

この青年に処女を捧げたセックスは、春美には楽しいものではなかった。

人並み外れたペニスには痛みしか与えられず、持ち主は痛苦を訴える春美を無視した。すぐによくになるとの一点張りで、一向によくならずには終わった後には、慣れれば大丈夫だからと言いだした。春美のことを気使う様子はなかった。

男のそんな態度に、気持ちよくなれない自分が悪いのか、と女としての劣等感に苛まれ、何をするにも自信が持てなくなっていく結果、狼塚夫婦の家に来た頃の像がで

おじさまにオンナにして頂きました

きあがったのだった。

「どうだ？ お前のまんこが、オレのものの形に変わっていくぜ？」

ゆったりとした粘っこい水音を室内に響かせながら、広一を越え、春美が使い慣れたバイブ並みの勃起ペニスが入ってくる。

広一の逸物と同じく熱く、ドクドクと脈動していて、その熱も震動も全て膣内に伝わってくる。

性交渉を繰り返してこなれた膣内には、確かに快感が生まれている。しかし、広一にされている時ほど鼓動は早くならないし、身体も火照らない。嫌な奴の汚いペニスを入れられて気持ち悪いという気持ちも大きい。

（早く終わらないかしら）

元カレへの興味も、セックスの悦びも全く感じられない春美は、筋肉で盛り上がった胸板をただぼんやりと見上げていた。

本人の意思に反して膣内は相応に濡れていたもので、長大なペニスの相手をしてもらえほど苦痛はなかった。広一とする時にはそれなりの時間が必要だというのに、元カレはあっさりと子宮口に到達し、子宮を揺らさんばかりの勢いでドスドス突き出した。それはなかなか苦しかったが、言ってもムダだと判断してさせるままにして終わるのを待った。

第八話 望まなかったスワッピング

「ふう、春美のまんこは最高だな。なあ、また付き合おうぜ」

勝手に射精を済ませ、独りで盛り上がる元カレは春美の様子をよく見ていなかった。「嫌。もうこれきりにして。今度どこで見掛けても話しかけないでよね」

「おいおい、なんだよ。ひよつとして、ツンデレってやつか？ お前だって、満更でもなかったんだろう？」

物分りの悪い男の目を見据えた。

「バカ」

激怒した千風をよく思い出しながら、思い切り怒気を込めて言っただった。

「なっ……!？」

ようやく気持ちが伝わったらしい。彼は困惑顔になった。何度も目をパチクリさせて、珍妙な生き物でも見るかのように春美を見始める。

「わけわかんねー女だなあ。白けたぜ。おい、帰るぞ。オレんちで口直しさせてやるよ。短小おっさんの相手してご苦ろ……」

言い終わる前に絶句する。反対側のベッドの有様に春美も目を丸くした。

十代のトランジスタグラマーは、ギャグボールを噛んで仰向けに寝ていた。上半身を白濁塗れにさせて。

第八話 望まなかったスワッピング



おじさまにオンナにして頂きました

こしている。陸に釣り上げられた魚みたいに、何度も腰が跳ねて安ベッドを軋ませた。短小持ちの広一を思い切り馬鹿にしていた小娘が、その情けない逸物の射精を顔面で受け止めさせられて、絶頂に達してしまっている。

「あは……はああああ……ああ……」

空気漏れみたいな呻きを漏らし、彼女がくたりとベッドに沈む。

「おい、失神する前に大事な仕事が残っているだろ？」

冷酷でサディステイックな響きが宿っていた。広一のそんな声を、そこそこ付き合いの長い春美も聞いたことはなかった。

残り汁を垂らすペニスが彼女の口元へ突きつけられる。すると、彼女は首を起こして全部を口内に含み、口腔粘膜と舌でちゅぱちゅぱ舐め清め始めた。

頬をもごもご動かし、時には蛸の口みたいに歪めて尿道内の残滓を吸い飲む。それほど嬉々としてしているわけではないのだが、その所作や顔には雄々しい牡に奉仕できる悦びの感情を滲ませている。

「ちゅぷん……はあ、はあ……これで大丈夫です……馬鹿にしまった短小オチンポ様を……はあああ……わたしのいやらしい口でお掃除させていただきました……
ああ……」

言い終えると、糸の切れた操り人形みたいに頭がベッドに沈んだ。

第八話 望まなかったスワッピング

「うん、ご苦労さん。なかなかよかったよ」

唾液でぬらつくペニスをシートで適当に拭くと、広一は服を着始めた。

自分でもここまでされたことはないのにと、呆然としていた春美が我に帰って、同じく身支度をやる。

「なんだ……これ……この、情けないちんぽのおっさんが、コイツをここまで追い詰めたのかよ……」

涙と涎を垂らしながら、焦点の合わない目で天井を見上げ、すっかり力を失くしている彼女を見ながら、信じられないという顔で青年が呟く。そのペニスはすっかりしぼんでしまっている。

「ちんぽのサイズが、セックスのよしあしを決める決定的な要素じゃないってことだよ。まだまだ若くて、立派な物を親からもらってるんだから、セックスについてじっくり考えてみるといい」

背中越しに言い放つ広一。入り口の床に料金を置いて、春美と退出した。

「悪かったね春美ちゃん。嫌な思いをさせて」

「いえ……でも、どうしてスワッピングなんか承諾したんですか？」

時刻は午後七時を回り、外はすっかり暗くなっている。ふたりは帰宅するために駅

おじさまにオンナにして頂きました

前のタクシー乗り場に向かっていた。行き交う数え切れない足音や、道路を走る車の音がやかましく、他に春美たちの会話を聞く者はいない。

「春美ちゃんが塞ぎこんで……苦しんでいた原因の元カレみたいだったから。裸同士になって面と向かって拒絶すれば、ふつきれると思って。今の春美ちゃんなら、それができると信じてた。そうなればもう、嫌な夢を見なくてすむかも知れないんじゃないかって」

「あ……」

狼塚夫婦のお陰で明るくなった春美だが、今でも時々悪夢にうなされる。内容は元カレとの初体験の記憶だ。広一に話したことはないが、千風に零したことはあった。それが夫にも伝わっていたのだろう。

「そうだったんですか……でも、そういうことは相談してくれないと。わたし、本当に嫌だったんですから……今でも、アソコにアイツの感触が残って気持ち悪くて」

「ごめんごめん。けど、話したら断られると思ってさ。身勝手を通させていただけでした……帰ったら、そんなのがなくなる位に擦ってあげるから許してよ」

「もう、しょうがない人なんですから……でも、わたしのためにスワップングをしたんなら、あの子にあそこまでしたのはどうしてなんですか？」

首を傾げる春美に、広一は笑って答えた。

第八話 望まなかったスワッピング

「俺も聖人君子じゃないからね。モノを若い男の子と比較された上に馬鹿にされたんじゃない、腹が立つし悔しい思いもする。あと、そんな風に馬鹿にしてきた子をセックスで屈服させるのも好きだし」

「ああ……なるほど」

ポーカーフェイスを通しながら、腸を煮えくり返らせていたらしい。それをバネにして責め立てたのだろう。

それにしても苛烈だと春美は思ったが、ふと、千風が広一のことを支配したがりと言ったことが思い出された。

「あと、あんまりセックスの楽しさを知らないようだったから、ちよつと手ほどきしたくもなつて。ちよつとやり過ぎたかも知れないけど」

しんみりした顔で広一が続ける。

「性別の意義とか、セックスの悦びとか大事なことなのに、真剣に教えようとする人間はあまりに少ないんだよね……俺の場合は子供の頃から周りの大人が教えてくれたけど、そういうのは稀で……あの子も、ペニス自慢の彼にしる、確かな大人に教えられないで大きくなったんだと思う。可哀想な被害者だよ彼らは」

「おじさま……?」

「なんてね。はあ……結構遅くなったから、千風のやつ怒ってるかもなあ。電話い

おじさまにオンナにして頂きました

れとくか。えーと、財布は……」

「あ、わたしテレカあります」

「おー、ありがとうございます。それじゃ、あそこでかけてくるよ。春美ちゃんはタクシー乗り場で車を確保しといてくれる？」

「わかりました。気をつけてくださいね」

「うん、そっちもね」

そうして、ふたりは帰路につく。家では、千風が風呂と夕食の用意をして待っていてくれた。遅くなった原因を包み隠さず話しながら、三人は食事を進めた。

ことの終わり

【二野辺春美の日記より】

二〇×☆年三月〇□日。天気は晴れ。

七ヶ月ぶりに家に帰ってきた。二十年も暮らしていたのに、帰ってきた時はなんだか他人の家に来たみたいだった。

夕飯は、お母さんの手料理と千風さんが持たせてくれたお赤飯だった。赤いご飯がたっぷり詰まった三段重ねのお重を見せた時、お父さんもお母さんもくすぐったそうに笑っていた。千風さんがくれた理由も分かっていたみたい。ふたりとも喜びながら美味しくそうに頬張っていた。向こうにいた時の話をたくさんすると、一層にここにこしていた。

ふう。おじさまと千風さんと別れて寂しいけれど、会おうと思えばいつでも会えるから、会いたくなったらお邪魔するつもり。

大学が始まれば忙しくなるだろうから、なかなか会えなくなるかも知れないけれど、その時は暫定恋人のバイブに慰めてもらおう。

その時は暫定恋人のバイブに慰めてもらおう。そうして頑張っていこう。千風さんやお母さんみたいな女になって、ひとりでも生き

おじさまにオンナにして頂きました

ていける位にがっぽり稼げる大人になって、親孝行もして、おじさまみたいな男の人と結婚したいな。産んだ子供は、わたしが大事にされたみたいに大事にしよう。
これからの毎日もとても楽しみだ。

終